

第163表 第114・115・117号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	3.0		AD	1	明赤褐	20	SJ114 Pit 3
2	環	(13.0)	2.8		ADH	1	明赤褐	20	SJ114
3	環	(11.0)	3.4		ADEH	2	橙	25	SJ114
4	高台椀	(14.4)	5.2		ADEH	1	灰白	30	SJ114 Pit 1
5	小皿	9.2	2.7	5.2	BDH	1	にぶい橙	100	SJ114 カマド No.8 外面に黒斑あり
6	甕		2.1	(10.0)	ADE	2	にぶい赤褐	20	SJ114 Pit 3
7	須恵鉢				E	2	暗灰	5	SJ114 未野産か
8	羽釜	(22.0)	15.6		BDEH	1	にぶい赤褐	20	SJ114 カマド No.2 土師質 非ロクロ整形
9	甕		7.5	(26.5)	DH	2	にぶい褐	30	SJ114 カマド No.4
10	環	(13.0)	3.6		DEH	2	にぶい赤褐	10	SJ115 掘り方
11	須恵環	(12.2)	4.5	6.0	BDEH	2	灰黄	30	SJ115 掘り方 産地不明
12	須恵環	(14.2)	3.2		BCEJ	2	灰	25	SJ115 掘り方 未野産
13	須恵高台椀		4.4	5.4	EIJ	2	黄灰	60	SJ115 掘り方 未野産
14	台付甕		5.5	9.0	ADE	1	にぶい赤褐	60	SJ115 掘り方
15	台付甕	(12.0)	5.9		BDE	2	にぶい橙	10	SJ115 掘り方
16	甕	(19.0)	6.5		ADE	1	にぶい褐	20	SJ115 掘り方
17	甕	(20.0)	5.6		ABE	2	明赤褐	20	SJ115 掘り方
18	須恵高台椀	(14.0)	5.8	5.6	BEIJ	3	灰黄褐	40	SJ117 未野産

住居跡出土遺物と土塚墓出土遺物に時期的な差はあまり認められないが、床の遺存状態から第1号土塚墓の方が新しいことは確実である。住居廃絶直後に造られた、いわゆる廃屋墓と考えられる。

平面形は横長方形で、規模は長軸3.18m、短軸2.25m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。床面はやや凹凸があり、全体に堅く踏み固められていた。特にカマド前面はバリバリに硬化している。

カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれていた。側壁の先端付近には片岩系の板石が据えられた状態で検出された。カマド構築材の一部と思われる。同様な板石は、カマド内及びカマド前面にも散乱していた。底面は平坦で、灰層が薄く堆積する。カマド前面の Pit 2 には灰・炭化物混じりの焼土が充填され、灰溜め状ピットと思われる。

ピットは4本検出された。Pit 1 は南西コーナーに位置し、カマド対向ピットと考えられる。深さ23cm。Pit 2 は上述したように灰溜め状ピットである。Pit 3・4 は上面に貼床されており、住居よりも古い段階の所産である。壁溝は南壁を除いて巡っていた。

出土遺物は少なく、ロクロ土師器高台椀、甕、羽釜がある(第356図1~6)。

第356図1はロクロ土師器高台椀である。カマド内

と南壁際の破片が接合した。内面ヘラミガキ調整。やや不明瞭であるが、内面が黒ずんでいる部分があることから本来黒色処理がなされたものと思われる。

2は土師器甕胴部片。外面は指ナデ整形後、雑なヘラケズリを行っている。外面の凹凸が激しい。3も土師器の甕で、非常に器壁が厚い。胴部外面縦方向のヘラケズリ。4は甕胴部から底部の破片。外面ヘラケズリ調整で、器壁は厚い。3の甕とよく似ているが、粗い鉱物粒子をより多く含んでいる。

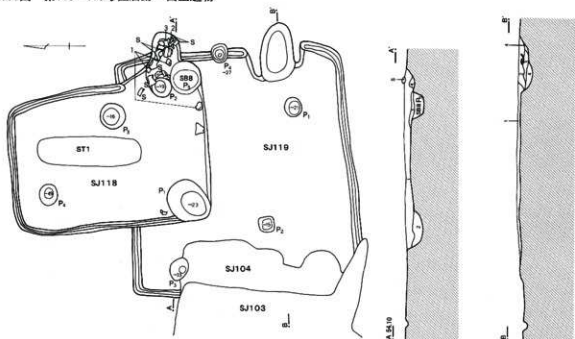
5は土師質の羽釜である。ロクロ整形されている。素地土は細かく、雲母状の微粒子を多く含む。6は土師質の羽釜胴部片。非ロクロ整形か。器壁は薄く、胴部はヘラケズリ調整される。住居の時期は10世紀後半~11世紀初頭頃と考えておきたい。

第119号住居跡 (第356図)

第119号住居跡は、E-18グリッドに位置する。第103・104・118号住居跡に切られていた。

平面形は正方形で、規模は長軸4.03m、短軸3.76m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-87°-Eを示す。床面はやや凹凸があり、全体に堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれ、底面は皿状に窪む。第3層が灰層、第4層は掘り方埋土である。

第356図 第118・119号住居跡・出土遺物



SJ118

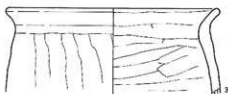
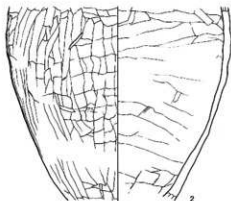
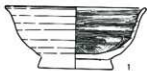
- 1 暗褐色土 ローム殻・焼土粒少量
- 2 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック・焼土粒微量 (ピット1)
- 3 黒色土 ローム殻微量 (灰層)
- 4 黄褐色土

SJ119

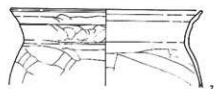
- 1 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック少量
カマド
- 2 暗褐色土 ローム殻・焼土粒・炭化樹皮少量
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化樹皮多量 (灰層)
- 4 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック多量 (掘り方)



SJ118



SJ119



第164表 第118・119号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台碗	(14.8)	5.5		DH	1	にぶい褐	80	SJ118 カマド No.5・6 ロクロ土師器 内面ミガキ
2	甕		20.3		EH	2	灰褐	40	SJ118 カマド No.12
3	甕	(22.0)	9.2		DEGIJ	1	にぶい黄褐	23	SJ118 カマド No.11
4	羽釜		14.2	(10.8)	G I J	1	にぶい赤褐	10	SJ118 カマド
5	羽釜		7.5		ACGIJ	2	黒褐	5	SJ118 土師質ロクロ整形
6	羽釜		3.0		AEG	1	黒褐	5	SJ118 Pit 2 土師質 非ロクロ
7	甕	(20.2)	8.0		BCDH	1	にぶい赤褐	20	SJ119 カマド内

ピットは4本検出されたが、住居に伴うものはない。壁溝はカマドを除き全周する。

出土遺物は非常に少なく、カマドから土師器甕が1点検出されたに留まる(第356図7)。第356図7は土師器甕で、口縁部は「コ」の字状に外反する。いわゆる「コ」の字状口縁甕であるが、頸部は外傾し、古段階の特徴をもっている。住居の時期は9世紀前半と思われる。

第120号住居跡 (第357図)

第120号住居跡は、E-18・19グリッドに位置し、第121号住居跡・第16号井戸跡を切っている。

平面形は正方形で、規模は長軸3.03m、短軸2.50m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-81°-Eを示す。

床面は中央部が深く壁際がやや浅い傾向にあり、全体に堅く踏み固められていた。

カマドは東壁の南端に設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれていた。底面は床面と同一面で続き、中央付近が被熱していた。また、両側壁の上面は強く被熱している。カマド内には片岩系の板石と土器片が散乱した状態で検出された。

ピットは北西コーナー部から1本検出された。深さ20cm。カマドの対角線上に位置する点で異例ではあるが、カマド対向ピットと考えてよからう。

出土遺物は比較的多く、土師器杯、ロクロ土師器小皿・高台碗、甕が検出された(第357図1~13)。ほとんどの遺物はカマド内から出土した。その他、北東コーナー部からは礫がまとまって出土している。

第357図1は土師器杯。第16号井戸跡に帰属するものか。2・3はロクロ土師器小皿。底部は回転系切りである。4~10はロクロ土師器高台碗である。8・9を除き、内面黒色処理とヘラミガキが施されている。

4は口縁部外面にもヘラミガキが及ぶ。12は暗文環。体部と底部はヘラケズリ、内面放射暗文が施される。素地土はやや粗く、白色針状物質が含まれる。藤岡周辺地域で生産されたものか。重複する第121号住居跡に帰属するものと思われる。13は土師器甕。口縁部を欠く。胴部は指ナデとヘラケズリ(ヘラナデに近い)が施される。住居の時期は10世紀後半と推定される。

第121号住居跡 (第357図)

第121号住居跡は、E-18・19グリッドに位置する。第120号住居跡・第16号井戸跡に切られていた。

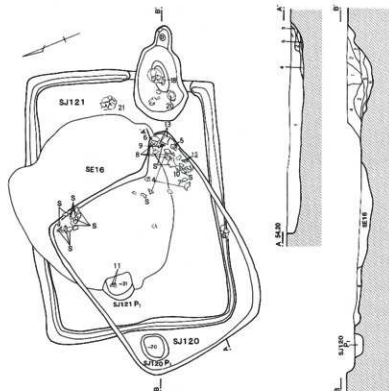
平面形は縦長の長方形で、規模は長軸4.23m、短軸3.10m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-108°-Eを示す。

床面は概ね平坦で堅く踏み固められていた。カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は壁を切って掘り込まれ、段差をもって煙道部に続く。底面は皿状に掘り込まれ、第5層が灰層、第6層が掘り方埋土である。天井部崩落土には焼土ブロックが多量に含まれている。袖部は検出されなかった。

ピットは1本あるが、井戸跡に壊されていた。壁溝はカマドを除き全周する。

出土遺物は土師器杯・甕・甔・台付甕がある(第357図14~19、第358図20~27)。14~20・26・27は土師器杯で、14~17は混入。おそらく第16号井戸跡に伴うものであろう。20は完形の杯でカマド内から出土した。扁平な形態で、底部はやや丸底風となる。19・26・27は平底形態の暗文環。底部内面に螺旋暗文、周辺に放射暗文が施される。21は甔でカマド脇の床面から出土した。甕は口縁部が緩やかに外反する武蔵型甕である。住居の時期は8世紀中葉~後半頃と推定される。

第357図 第120・121号住居跡・出土遺物(1)



SJ120

- 1 暗褐色土・ローム殻・焼土殻少量
- SJ120 カマド

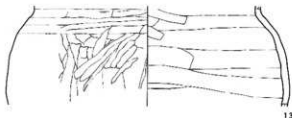
- 2 暗褐色土・ローム殻・焼土殻少量、白色粘土多量
- 3 暗褐色土・焼土殻少量、白色粘土少量
- 4 黒色土・ローム殻少量 (灰層)
- 5 赤褐色土・焼土 (灰床面)

SJ121

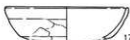
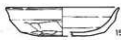
- 1 暗褐色土・焼土殻中多量 (灰入土上)
- 2 褐色土・焼土ブロック多量、ローム殻少量 (天井部暗褐色土)
- 3 暗褐色土・焼土殻少量 (灰入土上)
- 4 暗褐色土・ローム殻・焼土殻多量
- 5 黒色土・灰多量、焼土殻・炭化物殻中多量 (灰層)
- 6 暗褐色土・灰・ロームブロック・焼土殻混入 (掘り方)



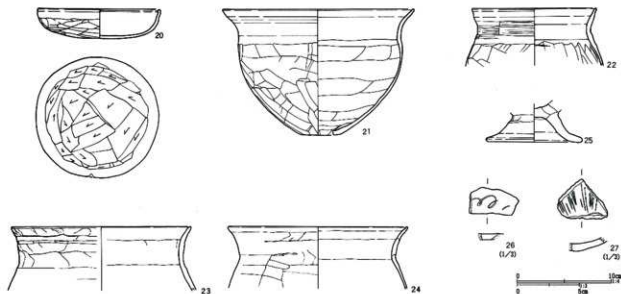
SJ120



SJ121



第358図 第120・121号住居跡出土遺物(2)



第165表 第120・121号住居跡出土遺物観察表

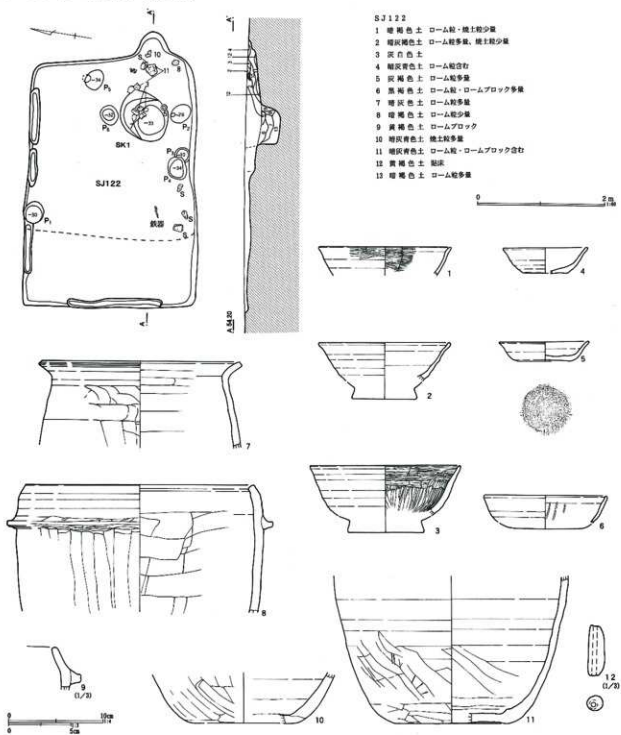
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.0)	3.0		A E H	2	橙	10	SJ120
2	小皿		1.4	(5.0)	A D E	1	にぶい黄橙	30	SJ120 ロクロ土師器
3	小皿		1.4	4.9	A E G I	1	にぶい橙	80	SJ120 カマド ロクロ土師器
4	高台椀	15.2	6.2		B D E H J	1	にぶい褐	75	SJ120 カマド No 8・20・23 ロクロ土師器
5	高台椀		4.2	(8.2)	A D I	2	にぶい赤褐	50	SJ120 カマド No 9 ロクロ土師器 内黒ミガキ
6	高台椀		5.3	8.4	D E G	1	にぶい褐	50	SJ120 カマド No 2 ロクロ土師器 内黒ミガキ
7	高台椀	(14.7)	4.5		A D G I	1	にぶい赤褐	10	SJ120 カマド No 19 ロクロ土師器 内黒ミガキ
8	高台椀	(13.8)	5.8	6.3	A C D G I	2	橙	60	SJ120 カマド No 1・10・11 ロクロ土師器
9	高台椀		4.6	(9.0)	A C E G	2	灰黄褐	70	SJ120 カマド No 4 ロクロ土師器
10	高台椀		2.9	8.4	D E G	2	にぶい黄褐	30	SJ120 カマド No 15 ロクロ土師器
11	台付甕		3.6	10.2	B D E H	1	にぶい橙	80	SJ120 No 31
12	環	(16.0)	4.0		B D E H	1	明赤褐	25	SJ120 カマド No 13 SJ121 内面放射暗文
13	甕		10.5		D E I	1	赤褐	15	SJ120 カマド No 3
14	環	(11.8)	3.4		A D H	1	橙	35	SJ121 SE16
15	環	(12.0)	3.0		D E J	2	にぶい橙	15	SJ121 SE16
16	環	(14.0)	3.4		A D E	2	橙	10	SJ121 SE16
17	環	(13.0)	3.4		A D E H	3	橙	15	SJ121 SE16
18	環	12.6	3.0		D H	1	にぶい褐	60	SJ121 No 4
19	環	(14.0)	2.9		D E H	2	にぶい赤褐	10	SJ121 内面放射暗文
20	環	12.8	3.1		B D H	1	橙	100	SJ121 No 2
21	甕	20.2	13.2	4.2	B D E H	1	明赤褐	80	SJ121 No 8
22	小型甕	(13.0)	6.1		A D E	1	にぶい褐	30	SJ121 カマド
23	甕	(19.0)	6.7		A C E I J	2	橙	40	SJ121 SE16
24	甕	(19.0)	6.5		B D E	2	にぶい赤褐	20	SJ121 カマド
25	台付甕		3.6	9.8	A D E H	2	にぶい橙	90	SJ121 確認面
26	環				D E	2	明赤褐	破片	SJ121 SE16内面ラセン暗文
27	環				A B E	1	明赤褐	破片	SJ121・120 確認面内面放射ラセン暗文

第122号住居跡 (第359図)

第122号住居跡は、E-20グリッドに位置する。北壁際にある Pit 1 は覆土の状態や位置関係から住居に

伴うピット (カマド対向ピット) と考えて良いものである。カマド対向ピットはカマドの正対する壁際に掘り込まれる特徴を持つことから、西壁部は拡張された

第359図 第122号住居跡・出土遺物



可能性が高い。

建て替え後の住居跡の平面形は縦長の長方形で、規模は長径3.89m、短径2.75m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-83°-Eを示す。

床面は凹凸があるが、全体に堅く踏み固められてい

た。カマドは東壁の南端部に主軸に沿って設置されていた。燃焼部は壁を切り込んでおり、袖は確認できなかった。第10層の暗灰青色土には焼土粒が多量に含まれており、天井部崩落土と考えられる。第11層は、天井部崩落土または流入土と思われる、第11層下面が火床

第166表 第122号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	碗	(14.0)	3.0		A E J	2	にぶい褐	10	ロクロ土師器 外面口縁部及び内面にミガキ
2	高台碗	(14.0)	4.0		A E H J	2	にぶい赤褐	10	ロクロ土師器
3	高台碗	(15.8)	5.2		A D E J	1	橙	30	Na11 ロクロ土師器 内面ミガキ
4	小皿	(9.0)	2.7	(4.6)	A D E J	2	橙	20	ロクロ土師器
5	小皿	9.5	2.0	5.5	A B D E H	1	橙	100	Na13 ロクロ土師器
6	坏	(13.0)	2.8		A E H	2	橙	5	内面放射暗文
7	甕	(21.0)	9.1		A D E J	2	にぶい橙	10	Na12
8	羽釜	(24.0)	13.4		A B E I J	1	にぶい黄橙	20	Na1 土師質 胴部タテケズリ
9	羽釜		3.3		D E	2	黒褐	5	覆土 土師質
10	羽釜		5.3	(12.0)	A B E I J	1	にぶい橙	20	Na2 土師質 ロクロ整形
11	羽釜		15.5	(12.0)	A B E I J	3	黒褐	20	Na5・8 カマド 土師質 ロクロ整形
12	土鏝	長3.9cm 最大径1.3cm 孔径0.3cm 重量6.23g にぶい黄橙							

面に相当しよう。

土鏝はカマド前面に1基検出された(SK1)。円形プランで、深さ33cm。上面に貼床が施され、住居に伴う床下土鏝と考えられる。

ピットは6本検出された。Pit1以外は住居には伴わないであろう。Pit1は前述のようにカマドと対角線に位置するが、カマド対角ピットと考えられる。

壁溝は北壁と西壁の一部に通っている。

出土遺物はロクロ土師器の碗・高台碗・小皿、土師器環・甕、羽釜、土鏝がある(第359図1~12)。3・4は覆土から、7は1号土鏝内から、10・11の羽釜の底部はカマドの手前から出土した。図化していないが棒状鉄器が覆土から出土している。5は出土位置が不明である。共存遺物として良いか疑問もある。

第359図1~3はロクロ土師器高台碗。1は器壁が薄く作りはよい。内面と口縁部外面は丁寧なヘラミガキ。3は内面ヘラミガキ調整される。やや黒ずむ部分があり、本来は黒色処理されていた可能性がある。4・5はロクロ土師器小皿である。4はやや深身、5は完形で、浅身(扁平)。底部は回転系切り。7は土師器甕である。胴部外面はナゲ調整、残存部下部に縦方向のヘラケズリ痕が見える。8~11は羽釜である。8は土師質、非ロクロ整形で、胴部は縦方向の粗いヘラケズリ調整。10・11は土師質、ロクロ整形後、胴部下位をヘラケズリ調整している。住居の時期は10世紀後半~11世紀初頭頃と考えておきたい。

第123号住居跡 (第360図)

第123号住居跡は、F-18・19グリッドに位置し、住居北壁部を第1号溝跡に切られていた。

平面形は長方形で、規模は現在長で2.96m、短径2.92m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-89°-Eを示す。

床面は凹凸があるが、全体に硬く、カマドの手前が一段低くなっている。カマドは南東コーナーに設置されている。カマド主軸は住居に対してやや斜向している。燃焼部は壁ラインよりも突出し、燃焼部の先には細長く延びる煙道部が付く。燃焼部の中央には石製支脚が埋設された状態で検出された。底面の掘り込みは浅い。底面の一部は被熱しており、火床面となる。カマド燃焼部から前面にかけて礫が散乱していた。カマド南側の巨大な石は後世の混入と思われる。他の礫は円礫と、片岩系の板石があり、後者はカマド構築材の一部と考えられる。前者の用途は不明。

土鏝は住居中央付近から1基検出された(SK1)。上面に貼床されており、床下土鏝と考えられる。

ピットは南西の隅に1本検出された。Pit1は住居に付属するカマド対角ピットと考えられる。深さ35cm。

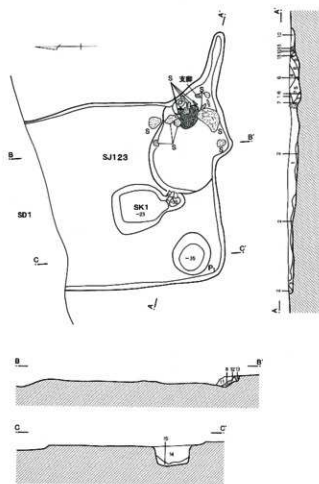
出土遺物は少なく、ロクロ土師器高台碗と土師器甕がある(第360図1・2)。土師器甕は覆土から出土している。1はロクロ土師器高台碗。器高2.5cm、底径が推定8.0cm。胎土は赤色粒・白色粒・砂粒を含み、焼成は普通である。色調はにぶい橙色で、残存率は10%で

大寄Ⅱ区

ある。内面にミガキと黒色処理が施されている。2は口径が推定で16.9cm、器高が11.5cm、やや小型の甕である。胎土は石英・白色粒・砂粒・片岩・礫を含み、焼成は良好である。色調は暗灰黄色で、残存率は20%である。外面は胴部上半を斜めに、下半を縦にヘラケ

ズリしている。但し、砂粒の移動は少なく、表面が光沢を帯びるなど、ケズリというよりもヘラナデに近い調整である。内面はナデ。住居の時期は10世紀前半～中頃と推定される。

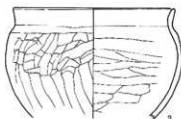
第360図 第123号住居跡・出土遺物



S.J.123

- 1 暗灰色土 ローム粘質土、焼土粒少量
- 2 暗灰褐色土 ローム粘質土
- 3 暗褐色土 ロームで構成
- 4 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック含む
- 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒含む
- 6 黄褐色土 ロームで構成
- 7 黒灰色土 ローム粘質土
- 8 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック含む
- 9 暗褐色土 焼土粒多量、ローム粒少量
- 10 暗灰褐色土 ローム粘質土
- 11 暗褐色土 焼土粒多量、ローム粒含む
- 12 暗褐色土 ローム粘質土
- 13 黄褐色土 ロームブロック
- ピット1
- 14 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 15 暗黄褐色土 ローム粘質土

0 2m



0 10cm

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第361図)

第1号掘立柱建物跡は、F・G-14グリッドで検出された。重複する第14号住居跡を切り、第13号住居跡に切られていた。第2号掘立柱建物跡と重複するが柱穴相互の切り合いはなく、新旧関係は不明である。

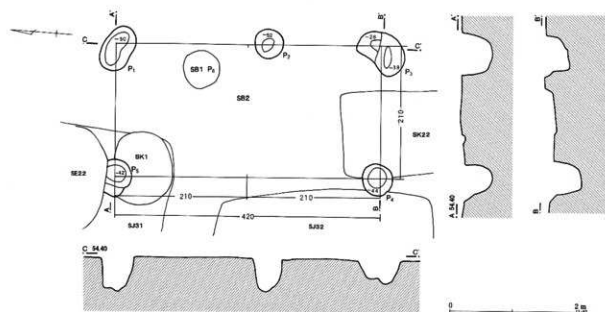
現状では3×2間、南北棟の側柱建物と考えられるが、西側の桁行と北側の梁行の柱穴は検出されなかった。北側には広がる可能性はないが、西側に建物が延

びる可能性はある。現状の建物規模は桁行7.80m、梁行5.20mである。主軸方向はN-28°-Wを示す。

柱間は梁行・桁行共に2.60m等間に揃う。柱穴は円形か、主体で径47~64cm、深さは25~54cmである。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確である。重複住居との関係から、7世紀前半以降、9世紀後半以前という時間幅の中には収まる。

第362図 第2号掘立柱建物跡



第4号掘立柱建物跡とも重複する。柱穴相互の切り合いはなく、新旧関係は不明であるが、本建物跡の方が古くなる可能性が高い。

3×2間の側柱建物である。規模は桁行6.00m、梁行4.00mとなる。主軸方向はN-46°-Wを示す。

柱間は桁行・梁行共にほぼ2.00m等間に揃う。柱筋も概ね通っている。

柱穴形態は円形または楕円形で、直径45-80cm、深さは28-55cmである。

出土遺物は土師器環・皿・小型壺が検出された(第363図)。第363図1は小振りの土師器模倣灰である。推定口径10cm前後、器高2.4cm。胎土に赤色粒子・白色粒子・砂粒を含み、焼成は良好。色調はにぶい橙色。約10%残存する。Pit 2から出土した。

2は土師器皿である。推定口径16cm前後、残存高2.5cm。胎土に角閃石・白色粒子・砂粒を含み、焼成は普通である。色調は橙色。約10%残存する。Pit 7から出土した。

3は小型の土師器壺である。推定口径11.8cm、残存高3.7cm。胎土に赤色粒子・角閃石・白色粒子・雲母状微粒子を含み、焼成は良好である。色調は橙色。約10%残存する。Pit 2から出土した。

出土遺物の時期は、1の土師器環が7世紀中葉～後半、2の皿は8世紀前半か。建物の時期は不明確であるが、9世紀末葉以前となることは間違いない。建物の主軸は7世紀代の住居とほぼ共通することから、概ね7世紀後半頃の建物と考えておく。

第4号掘立柱建物跡 (第364図)

第4号掘立柱建物跡は、C-17・18グリッドに位置する。第61-65・67号住居跡と重複する。第61号住居跡よりも古く、第63-65・67号住居跡よりも新しい。第62号住居跡との関係は不明である。

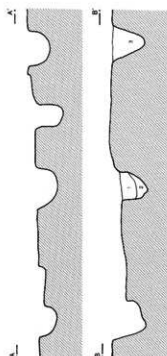
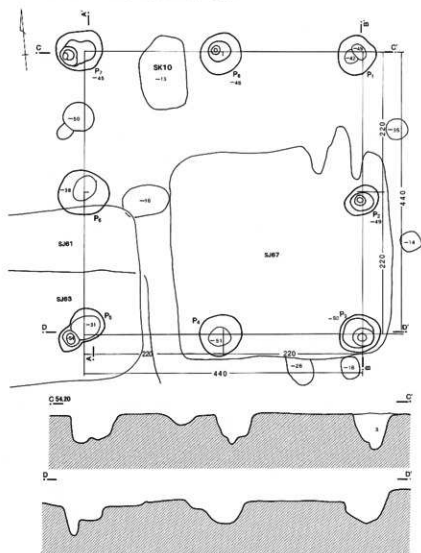
2×2間、ほぼ正方形の倉庫様建物であるが、中心部に床束をもたない。規模は桁行4.40m、梁行4.40mである。主軸方向はN-5°-Eを指す。

柱間は2.20m等間にほぼ揃い、柱筋も通っている。柱穴は円形または楕円形で直径43-83cm、深さ31-51cmを測る。

出土遺物は土師器環小片が1点検出されたに留まる(第364図1)。第364図1は土師器環。推定口径約12cm、残存高1.8cm。胎土に角閃石・白色粒子・雲母状微粒子を含み、焼成は良好である。色調はにぶい赤褐色。残存率10%以下の小片である。Pit 1出土。

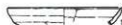
出土遺物は小片で時期決定の材料としては弱く、建

第364図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物



SB 4
 1 暗褐色土 ロームブロック多量 (抜き取り?柱眼なし)
 2 暗褐色土 ローム粒やや多い (抜き取り?柱眼なし)
 3 暗褐色土 ロームブロック少量 (柱眼みえない)

0 2m



0 10cm

出土遺物は少なく、土師器環と甕小片が検出されたのみである(第365図)。第365図1は土師器模倣灰環である。推定口径約12cm、残存高3.2cm。胎土に赤色粒子・角閃石・白色粒子・雲母状微粒子を含む。焼成は良好である。色調はにぶい橙色。残存率は約10%である。Pit 5から出土した。

2は土師器甕である。胴部は縦方向のヘラケズリ調整。推定口径約22cm、残存高3.5cm。胎土に赤色粒子・角閃石・白色粒子・雲母状微粒子を含む。焼成は良好である。色調はにぶい橙色。残存率は5%程度の小片である。Pit 5から出土した。

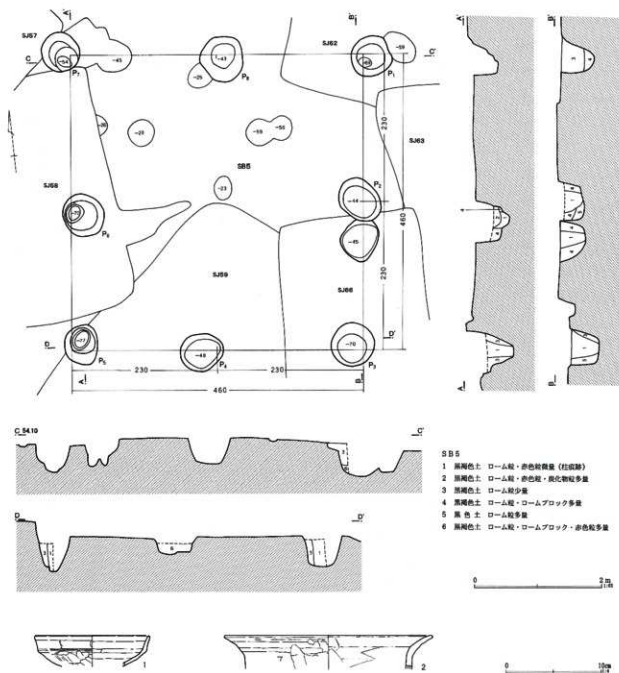
出土遺物は重複住居から混入した可能性が高く、建

物の時期決定の資料とはならない。重複遺構との関係から、7世紀後半または8世紀初頭以降、10世紀後半以前という限定ができるのみである。おそらく第4号掘立柱建物跡と関連する可能性が高く、8～9世紀代の建物と捉えておく。

第6号掘立柱建物跡(第366図)

第6号掘立柱建物跡は、C・D-18グリッドに位置する。北側にある第4・5号掘立柱建物跡と規模・形態・主軸方向がほぼ一致しており、3棟の建物跡は密接な関係にあったことが窺える。第70～72・80・82・84号住居跡と重複し、新旧関係は第71・72号住居跡を切り、第80・84号住居跡に切られていた。第70号住居

第365図 第5号掘立柱建物跡・出土遺物



跡との関係は不明確であるが、他の住居跡との関係からみて、本建物跡の方が新しいであろう。第82号住居跡との新旧関係は不明である。

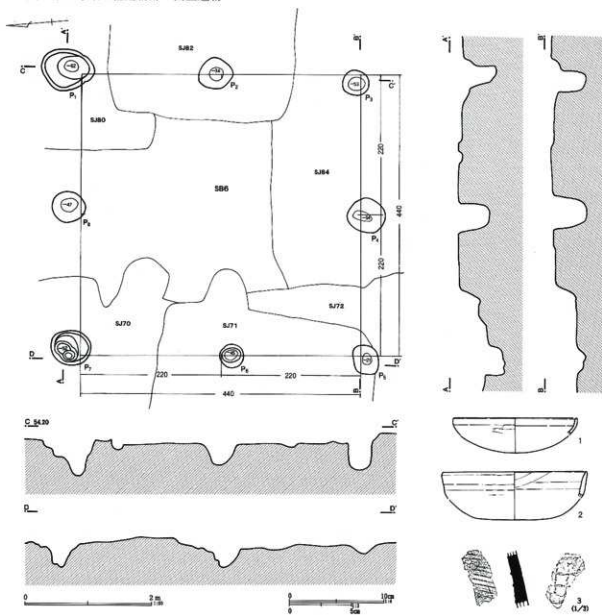
2×2間、ほぼ正方形の倉庫状建物跡であるが、中心部に東柱がなく、側柱構造を採る。規模は桁行4.40m、梁行4.40mである。主軸方向はN-4°-Eを示す。

柱間距離は概ね2.20m等間に揃うが、Pit 6はややずれ気味である。柱穴形態は楕円形あるいは円形で、

直径35～84cm、深さ21～62cmである。

出土遺物は土師器環と須恵器甕の小片がある（第366図）。第366図1は丸底形態の北武蔵型環で、口縁直下までヘラケズリされている。口径は約13cm。胎土に赤色粒子・白色粒子・雲母状微粒子を含み、焼成は良好。色調はにぶい橙色。5%程度の残存率。Pit 6から出土した。2はやや大振りの土師器環。口径約15cm。胎土に石英・角閃石・白色粒子・雲母状微粒子を含む。焼

第366図 第6号掘立柱建物跡・出土遺物



成は良好で、色調はにぶい赤褐色。残存率は5%程の小片である。Pit 3から出土した。3は須恵器攪胴部小片である。外面に平行叩き、内面には真格子叩き(当て具?)が施される特徴的な土器である。格子幅は0.9cm角となる。素地土は比較的細かく、白色粒子と黒色粒子の吹き出しが認められる。産地は不明であるが、群馬産、敢えていえば秋間産の可能性がであろうか。Pit 6から出土した。

出土遺物は混入の疑いがあり、時期決定の資料にはならない。重複遺構との関係から、8世紀前半以降、9世紀後半以前という限定はできる。第4・5号掘立

柱建物跡と同時期あるいは近接した時期に構築されたものと思われる。

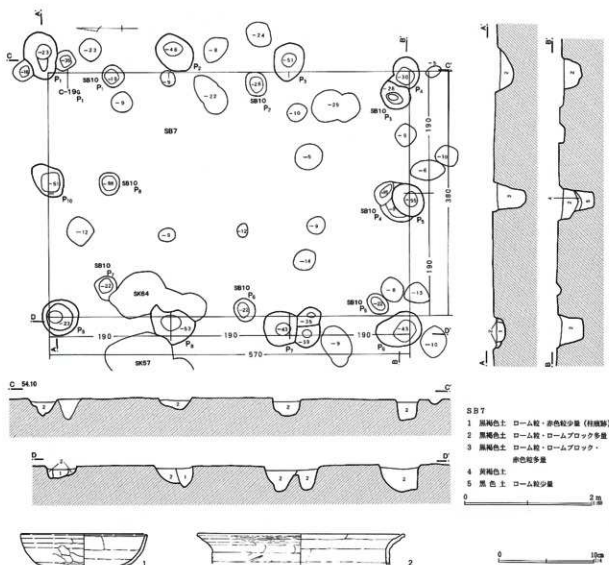
第7号掘立柱建物跡(第367図)

第7号掘立柱建物跡は、C-19グリッドに位置する。第57・64号土壌に切られていた。また、第10号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明確であった。

3×2間、南北棟の側柱建物である。規模は桁行5.70m、梁行3.80mほどに復元されるが、東側桁行のPit 1~3はやや外に開いている。主軸方向はN-2°-Wを指す。

柱間はほぼ1.9m等間となるが、Pit10はややずれ気

第367図 第7号孤立柱建物跡・出土遺物



味である。Pit 8・9は柱痕が認められた。柱穴形態は楕円形が主体で、直径46～89cm、深さは23～54cmである。

出土遺物は土師器環と甕小片が検出されたのみである(第367図)。第367図1は深身の土師器環である。体部は無調整、下端はヘラケズリされる。平底風の底部になるであろう。推定口径13.2cm、残存高3.4cm。胎土に赤色粒子・角閃石・白色粒子を含み、焼成は良好である。色調は橙色。残存率は5%程度。Pit 9から出土した。2は土師器甕である。いわゆる「コ」の字状口縁甕の口縁部片である。推定口径22.0cm、残存高3.2cm。胎土に赤色粒子・角閃石・白色粒子を含む。焼成

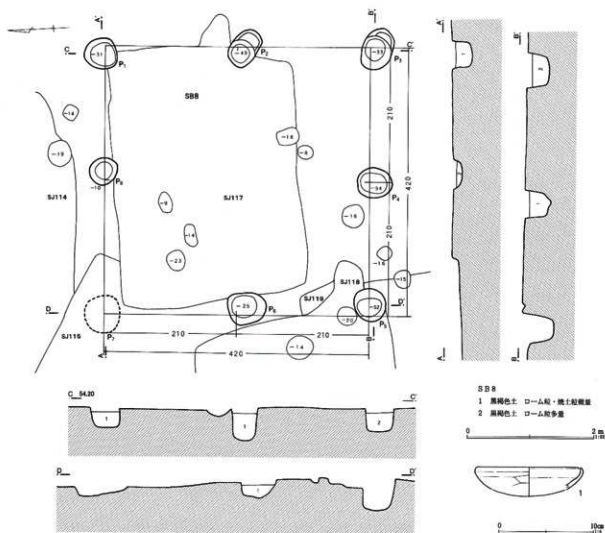
は良好で、色調は明赤褐色である。残存率は5%程度の小片である。Pit10から出土した。また、Pit 1に重複するC-19グリッド Pit 1からも1と同様の土師器環が出土しており、本孤立柱建物跡に含めて考えるべきかもしれない。建物の時期は、出土遺物や軸輪を考慮して、9世紀中葉～後半代と考えられる。

第8号孤立柱建物跡 (第368図)

第8号孤立柱建物跡は、D-19、E-18・19グリッドに位置する。重複する第117・118号住居跡に切られていた。第115号住居跡との関係は明確にできなかったが本建物跡の方が古い可能性が高い。

2×2間、ほぼ正方形の側柱建物である。Pit 7に相

第368図 第8号掘立柱建物跡・出土遺物



当する柱穴は、確認に努めたが検出されなかった。規模は桁行4.20m、梁行4.20mを測る。主軸方向はN-2°-Eを指す。

柱間は2.10m等間にはほぼ揃うが、Pit 8がややずれ気味である。柱筋は概ね通っている。柱穴形態は円形または楕円形で、直径41~67cm、深さは10~52cmである。

出土遺物は土師器環小片が検出されたのみである(第368図)。第368図1は口縁部が内屈する北武蔵型環である。推定口径11cm前後、胎土に角閃石・白色粒子・砂粒を含み、焼成は普通である。色調は橙色。残存率は5%程である。Pit 2から出土した。

出土遺物は混入の可能性が高く、時期は不明確であ

る。重複住居との関係から9世紀末葉またはそれ以前という限定はできる。

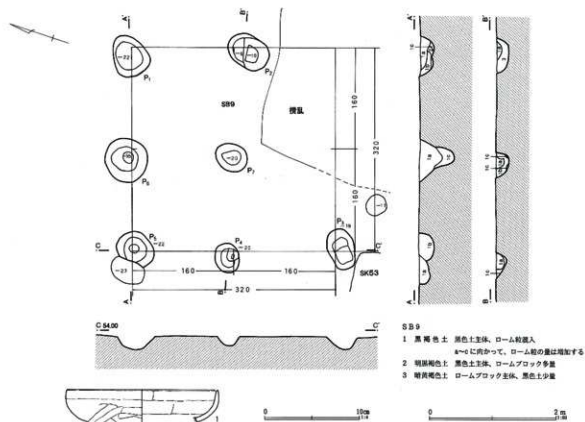
第9号掘立柱建物跡 (第369図)

第9号掘立柱建物跡は、E-20・21グリッドに位置する。建物南東部に攪乱が入り、全体の様相は不明である。

おそらく2×2間の総柱建物になるものと考えられる。柱間が短く、高床倉庫とみて良からう。規模は桁行3.20m、梁行3.20mを測る。主軸方向はN-18°-Wを指す。

柱間は1.60m等間にはほぼ揃う。柱筋も概ね通っている。柱穴形態は円形または楕円形で、直径38~71cm、深さは19~55cmである。

第369図 第9号掘立柱建物跡・出土遺物



出土遺物は土師器片が1点検出されたのみである(第369図)。第369図1は口縁部が直立し、やや扁平や丸底形態の北武蔵型環と思われる。体部上端に無調整部を残し、その下部はヘラケズリ調整される。推定口径16cm程。胎土に石英・白色粒子・雲母状微粒子を含む。焼成は良好。色調は明赤褐色。

建物の時期は不明確であるが、出土遺物が伴うとすれば、8世紀前半頃と推定される。

第10号掘立柱建物跡(第370図)

第10号掘立柱建物跡は、C-19グリッドに位置する。第64号土壌に切られていた。また、第7号掘立柱

(3) 溝跡

第1号溝跡(第371図)

第1号溝跡は、調査区西端のH-14グリッドから東に向かって緩やかな弧を描きながら延び、調査区中央付近で消滅している。2~3本の溝の複合体で、掘り込みは浅い。重複する全ての住居跡と第2号溝跡を切

建物跡の内側に検出され、新旧関係は不明確であるが、本建物跡の方が新しい可能性がある。

2×2間、南北棟の側柱建物である。規模は桁行4.50m、梁行3.30mである。主軸方向はN-2°-Eを示す。

柱間は桁行2.25m、梁行1.65m等間にほぼ揃う。柱筋は概ね揃うが、西側桁行の Pit 6が外側にずれている。

柱穴形態はほぼ円形で、直径20cm前後と小規模である。深さは20cm前後のものが多い。

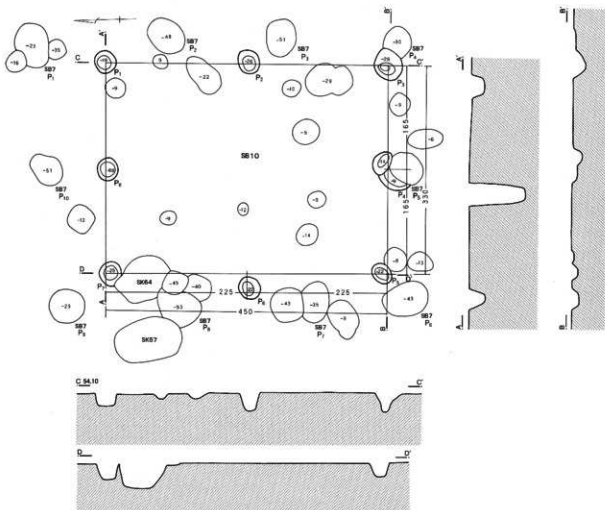
出土遺物は検出されず、時期は不明である。

っていた。

溝跡底面は部分的に硬化面が形成されており、小ピット(窪み)が連続する状況が認められた。これらのことから、本来道路跡として使用された可能性が高い。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確である

第370図 第10号孤立柱建物跡



が、古代の遺構を切っていることから、中世以降となることは疑いない。近代まで降る可能性もある。

第2号溝跡 (第371図)

第2号溝跡は、調査区西端のH-13・14グリッドに位置する。第1号溝跡に切られていた。長さ7m、溝幅は25~40cm、深さ30~40cm程である。

出土遺物は土師器環が2点検出された(第371図1・2)。第371図1は口径12.2cm、器高3.0cm。胎土に赤色粒子・石英・砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色。70%残存。2は推定口径12cm、残存高2.5cm。胎土に赤色粒子・白色粒子・砂粒を含み、焼成は普通である。色調は明赤褐色。15%残存する。いずれも口縁部が内湾気味で、丸底風の底部をもつ北武藏型坏である。時期は8世紀前半であろう。

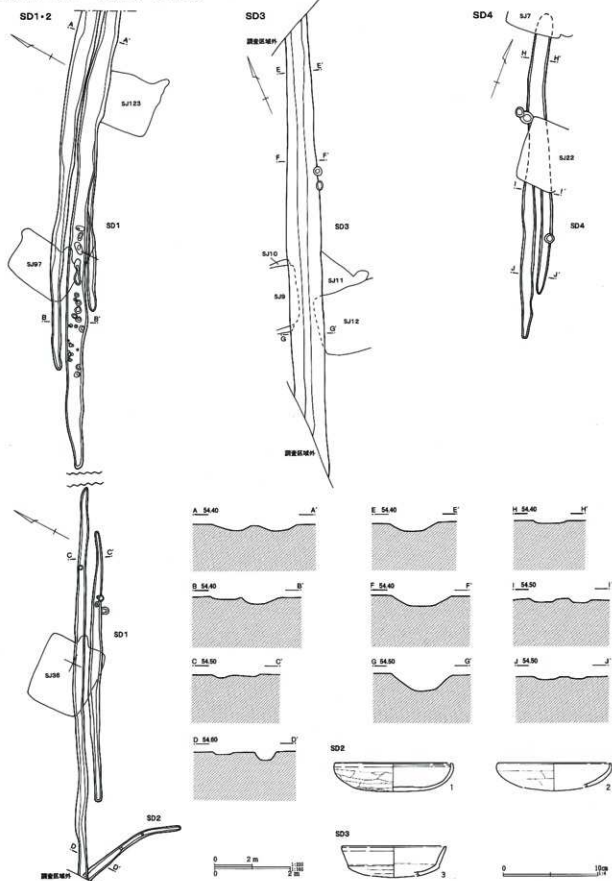
第3号溝跡 (第371図)

第3号溝跡は、調査区西端部を掠めるように直線的に南北流する。重複する古代の遺構は全て溝跡に切られていた。規模は長さ23.50m、幅1.20~1.70m、深さ0.25~0.40mである。底面のレベルはほぼ一定している。埋土には浅間A軽石と思われる火山灰が含まれていた。

出土遺物は土師器環が1点検出されている(第371図3)。第371図3は土師器模倣坏で、推定口径11cm前後、残存高3.0cm。胎土に角閃石・砂粒を含み、焼成は普通である。色調は橙色。残存率は20%程度である。全体に摩滅しており、調整は不明瞭。周辺遺構からの混入資料と思われる。

溝跡の時期はおそらく近世以降となろう。

第371图 第1~4号溝跡・出土遺物



第4号溝跡 (第371図)

第4号溝跡は、調査区北西部のD-15、E-15・16グリッドに位置する。第1号溝跡にはほぼ直交している。第7・22号住居跡の上部を通るが、掘り込みが浅く不明瞭であった。おそらく調査区の北側に抜けているものと思われる。

(4) 井戸跡

井戸跡は、32基検出された。漏斗状に掘り込まれる通常の井戸跡と、直径1m以下で筒状に掘り込まれる小規模な井戸跡がある。特に後者の比率が高い点が特徴である。小規模な井戸は時間的に古墳時代から奈良時代にかけてのものがほとんどである。

第1号井戸跡 (第372図)

第1号井戸跡は、D-16グリッドに位置する。平面形態は円形、規模は直径0.70m、筒状に掘り込まれ、深さ1.41mを測る。出土遺物は検出されなかった。

第2号井戸跡 (第372図)

第2号井戸跡は、D-15グリッドに位置する。近接して第3～5号井戸跡が存在する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.54m、短径0.45m。筒状に掘り込まれ、深さ1.37mを測る。

出土遺物は、最下層から須恵器蓋と土師器環が検出された(第373図1・2)。第373図1は小振りの環H蓋で、天井部はヘラ切り後ナデか。湖西産である。2は口縁部が小さく内湾する北武蔵型環。時期は7世紀後半と考えられる。

第3号井戸跡 (第372図)

第3号井戸跡は、D-15グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.56m。筒状に掘り込まれ、深さ1.25mを測る。

出土遺物は土師器環小片が1点検出された(第373図3)。土師器環は内面に被膜状の有機物が付着する。平底環となろう。9世紀代の土器で、井戸に伴うか否か不明瞭である。混入の可能性が高いであろう。

第4号井戸跡 (第372図)

第4号井戸跡は、D-15グリッドに位置する。平面

長さ約16m、北部の幅1.3m前後、南半は二股に分岐していた。深さは5～10cm程度である。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明瞭であるが、古代の住居跡を切っており、中世以降となることは疑いない。第1号溝跡とはほぼ同一時期か。

形態は円形、規模は直径0.56m、深さ1.28mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器環が1点検出された(第373図4)。土師器環は口縁部が短く直立し、口縁直下からヘラケズリされる。時期は8世紀初頭前後となろう。

第5号井戸跡 (第372図)

第5号井戸跡は、D-15グリッドに位置する。平面形態は円形、規模は直径0.45m、深さ1.04mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器環が3点検出された(第373図5～7)。5・6は小振りの模倣環である。7は北武蔵型環と思われるが、細片で混入か。時期は7世紀中葉～後半と考えておく。

第6号井戸跡 (第372図)

第6号井戸跡は、F-18グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.88m、短径0.80m、深さ1.44mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器環が2点検出された(第373図8・9)。いずれも細片で、遺構に伴うか否か不明瞭である。8は口縁部形態からみて、平底暗文環となろう。実測図よりも口径は大きいであろう。内面放身暗文が残る。9は平底環と考えられる。時期は不明である。

第7号井戸跡 (第372図)

第7号井戸跡は、B-20グリッドに位置する。第1・2・55号住居跡を切っていた。平面形態は楕円形である。規模は長径2.24m、短径1.93m、深さ1.35m以上となる。開口部に比べ、底面は窄まり、断面漏斗状となる。

出土遺物は土師器の環と皿、須恵器蓋がある(第

373・374図10～15)。11は扁平な丸底風の北武蔵型坏で、体部無調整、底部ヘラケズリされる。12は末野産の甕で、胴部平行叩き、内面同心円当て具である。時期は8世紀前半～中葉頃と推定される。

第8号井戸跡 (第372図)

第8号井戸跡は、D-15グリッドに位置する。第7号住居跡西壁部に重複し、本井戸跡の方が古い。平面形態は円形である。規模は直径0.52m、深さは1.03m以上となり、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物はやや小型化した土師器模倣坏が検出されている(第374図16)。時期は7世紀前半と推定される。

第9号井戸跡 (第372図)

第9号井戸跡は、E-16グリッドに位置する。周辺には本井戸跡と同様の小型井戸跡が密集している。平面形態は楕円形である。規模は長径0.44m、短径0.37m、深さ1.10mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器坏・皿・甕・小型壺が検出された(第374図17～22)。17は小型化した模倣坏で、口縁下の稜をケズリによって表すものである。18は平底風の坏となろう。甕は胴部が縦ケズリされる長胴甕である。18の坏は混入か。時期は不明確であるが、7世紀後半～8世紀初頭を中心とする段階と考えておく。

第10号井戸跡 (第372図)

第10号井戸跡は、B-19・20グリッドに位置し、第1・2・55号住居跡を切っていた。平面形態は楕円形である。規模は長径1.03m、短径0.93m、深さ1.45mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器坏が検出された(第374図23)。その他に、金銅製の耳環(第388図25)が覆土から検出されている。耳環は小型で、一部に鍍金された痕跡が残る。時期は第55号住居跡との関係から8世紀前半以降となる。出土土師器坏は小片であるが、9世紀には降らない。8世紀前半～後半頃と考えておく。耳環は第55号住居跡に帰属するものか。

第11号井戸跡 (第372図)

第11号井戸跡は、E-16グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径0.40m、短径0.34

m、深さ1.22mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は検出されなかった。

第12号井戸跡 (第372図)

第12号井戸跡は、E-16グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は直径0.52m、深さ1.40mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は検出されなかった。

第13号井戸跡 (第372図)

第13号井戸跡は、E-16グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は直径0.42m、深さ1.27mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器壺が検出された(第374図24)。器壁は厚く、武蔵型に移行する前段階のタイプである。7世紀～8世紀前半までのものであろう。

第14号井戸跡 (第372図)

第14号井戸跡は、E-16グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は長径0.38m、短径0.34m、深さ0.95mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は検出されなかった。

第15号井戸跡 (第372図)

第15号井戸跡は、E-16グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は直径0.40m、深さ0.74mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は検出されなかった。

第16号井戸跡 (第372図)

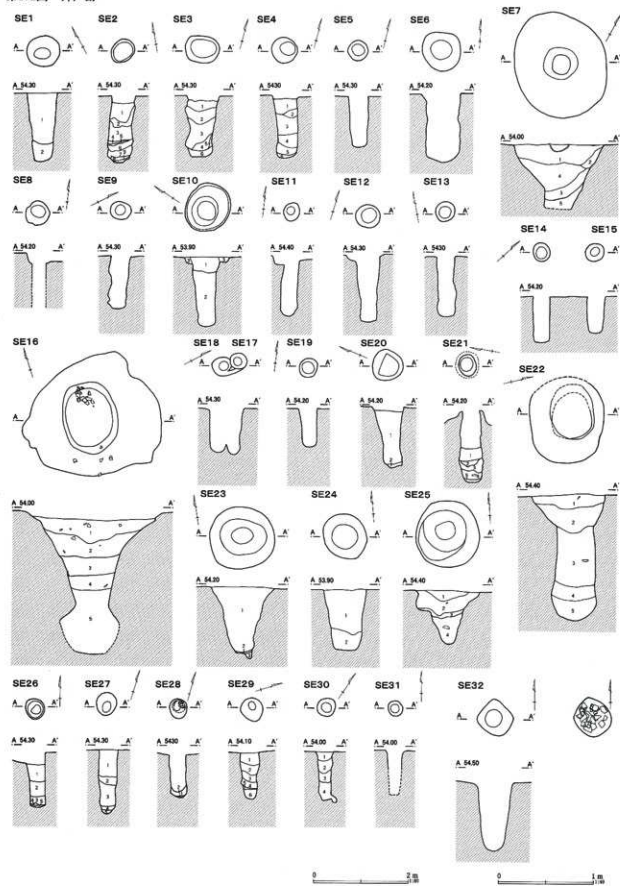
第16号井戸跡は、E-19グリッドに位置する。第121号住居跡を切り、第120号住居跡に切られていた。

平面形態は不整形円形、井筒部は楕円形である。規模は長径2.76m、短径2.58m、深さ2.82mを測り、漏斗状に掘り込まれていた。底面近くでは壁が崩落し、オーバーハングしていた。

出土遺物は上層から下層まで含まれており、量的にもまとまっている。器種としては土師器坏・甕・台付甕・鉢、須恵器坏・高台碗・瓶・甕、土製紡錘車、土錘がある(第374～376図25～62)。第374図25～37は土師器坏である。平底形態で、体部無調整、底部ヘラケズリされるものが主体となる。33はミニチュア坏であ

大審II区

第372岡 井戸跡



第373図 井戸跡出土遺物(1)

SE1

1 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック・
白色粘土少量

2 黒褐色土 ローム殻少量

SE2

1 黒褐色土 ローム殻・粘土・白色粘土・
ブロック少量

2 黄褐色土 ローム殻主体

3 黒褐色土 ローム殻少量

4 黒褐色土 ローム殻少量

5 黒褐色土 ローム殻少量

6 黒褐色土 ローム殻・白色粘土ブロック少量

7 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック少量

8 黄褐色土 砂質

9 灰土 酸化しており、ガチガチに堅い

SE3

1 黒褐色土 ローム殻少量

2 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

3 黒褐色土 ローム殻・シルト質の黄灰色
粘土少量

4 青灰色土 層々に黒褐色土を含む(黒腐)

5 黒褐色土 黄灰色粘土粒中に少量

6 黒土 しまり・砂粒微

SE4

1 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

2 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック主体

3 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック少量

4 黒褐色土 ローム殻少量

5 黒土 ローム殻少量

6 砂褐色土 砂質、ローム殻微

SE7

1 黒褐色土 ローム殻・粘土層まばらに含む

2 黒褐色土 ローム殻・ロームブロック少量
(埋め戻し)

3 砂褐色土 中々黒みが多い

4 黒土 ローム殻少量

5 黒土 ロームブロック・ローム殻少量

SE10

1 黒褐色土 ローム殻・粘土少量、白色
粘土ブロック少量

2 黒褐色土 ロームブロック・ローム殻少量

3 黄白色粘土

SE16

1 黒褐色土 ローム殻・赤色粒・炭化物粒少量

2 黒褐色土 ローム殻・赤色粒微

3 黄褐色土 赤色粒微

4 黒褐色土 ローム殻微

5 黒褐色土ローム殻・ローム・白色粘土ブロック含む、
木片・竹少量

SE20

1 黒褐色土 ローム殻少量

2 砂褐色土 酸化しており、ガチガチに堅い

SE21

1 黒褐色土 ローム殻、目土少量

2 砂褐色土 ローム殻少量

3 黒褐色土 ローム殻少量

4 灰土 ローム殻、黄灰色粘土少量

5 灰土 酸化し、ガチガチに堅い

SE22

1 黒褐色土 浅層砂粒層中に含む、
ローム殻少量

2 砂褐色土 ロームブロックまばらに含む

3 黒褐色土 ロームブロックまばらに含む

4 黄褐色土 ローム殻主体、黒褐色土・
白色粘土混入

5 黒褐色土ローム殻・ロームブロック・白色粘土混入

SE23

1 黒褐色土 ローム殻・粘土・炭化物粒少量
(自然埋)

2 黄褐色土 ローム殻主体(自然埋)

3 砂褐色土 ローム殻・粘土・黄灰色粘土
少量(自然埋)

SE24

1 砂褐色土 ロームブロック、ランダムに混在
(埋め戻し)2 黒褐色土 ロームブロック少量
(埋め戻し、自然埋)

3 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

4 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

5 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

6 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

7 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

8 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

9 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

10 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

11 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

12 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

13 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

14 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

15 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

16 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

17 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

18 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

19 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

20 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

21 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

22 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

23 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

24 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

25 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

26 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

27 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

28 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

29 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

30 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

31 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

32 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

33 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

34 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

35 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

36 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

37 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

38 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

39 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

40 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

41 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

42 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

43 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

44 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

45 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

46 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

47 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

48 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

49 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

50 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

51 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

52 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

53 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

54 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

55 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

56 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

57 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

58 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

59 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

60 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

61 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

62 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

63 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

64 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

65 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

66 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

67 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

68 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

69 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

70 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

71 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

72 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

73 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

74 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

75 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

76 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

77 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

78 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

79 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

80 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

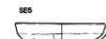
81 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

82 黒褐色土 ローム殻・粘土少量

SE2



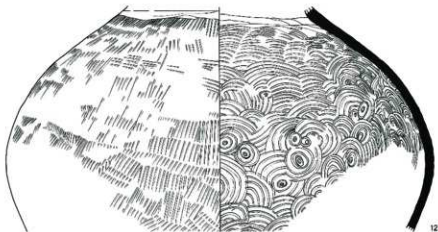
SE3



SE6



SE7



0 10cm

る。体部下端と底部をヘラケズリする。38-40は暗文環、やはり平底形態で、内面に放射状暗文が施される。41-48は須恵器環と高台椀。44と46は無台環。前者は末野産。後者は南比企産で、底部全面回転ヘラケズリ調整される。重複する第121号住居跡に帰属するものと思われる。41の高台椀は高古の作りがしっかりしており、焼きも良い。他の高台椀と比較して古相を示す。42は口縁部の外反が弱く、焼きも良いが、43・45・47・48は口縁部が大きく外反し、焼きもやや軟質となる。55は「コ」の字状口縁襷、51はその退化形態と思われる。56はロクロ整形の土師質甕で、底面から出土しているが、重複する第120号住居跡に帰属すると考えた方が良いかもしれない。57の鉢、58の甕は末野産である。60は土製紡錘車である。

遺物はやや年代幅のあるものを含んでいる。おおよそ9世紀後半-10世紀初頭頃まで機能していたものと考えられる。

第17号井戸跡 (第372図)

第17号井戸跡は、E-16グリッドに位置し、第18号井戸跡と重複する。平面形態は円形である。規模は直径0.34m、深さ0.96mを測り、筒状に掘り込まれていた。出土遺物はない。

第18号井戸跡 (第372図)

第18号井戸跡は、E-16グリッドに位置し、第17号井戸跡と重複する。平面形態は円形である。規模は直径0.40m、深さ0.90mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は、口縁部から内湾する丸底形態の土師器環が検出された(第376図63)。時期は7世紀末葉-8世紀初頭頃と考えられる。

第19号井戸跡 (第372図)

第19号井戸跡は、G-16グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は直径0.40m、深さ0.80mを測り、筒状に掘り込まれていた。出土遺物はない。

第20号井戸跡 (第372図)

第20号井戸跡は、G・H-15グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は直径0.64m、深さ1.26mを測り、筒状に掘り込まれていた。出土遺物は検出

されなかった。

第21号井戸跡 (第372図)

第21号井戸跡は、C-18グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径0.46m、短径0.36m、深さ1.48mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器甕が検出された(第376図64)。長胴甕で、胴部は斜めヘラケズリされる。7世紀後半-8世紀初頭頃のものであろう。

第22号井戸跡 (第372図)

第22号井戸跡は、F・G-13・14グリッドに位置する。第31号住居跡・第2号掘立柱建物跡を切っていた。西端部は調査区外にかかっている。

平面形態は楕円形である。規模は長径1.78m、短径1.56m、深さ2.62mを測り、上面はラッパ状、下面は筒状に掘り込まれていた。

出土遺物はロクロ土師器高台椀と羽釜がある(第376図65・66)。井戸の時期は10世紀後半-11世紀と推定される。

第23号井戸跡 (第372図)

第23号井戸跡は、F-18・19グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径1.38m、短径1.27m、深さ1.50mを測り、漏斗状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器環と須恵器環がある(第376図67・68)。土師器環は丸底形態の北武蔵型環、須恵器環は底部ヘラ切り、秋間産である。第100号住居跡の破片と接合した。時期は8世紀前半である。

第24号井戸跡 (第372図)

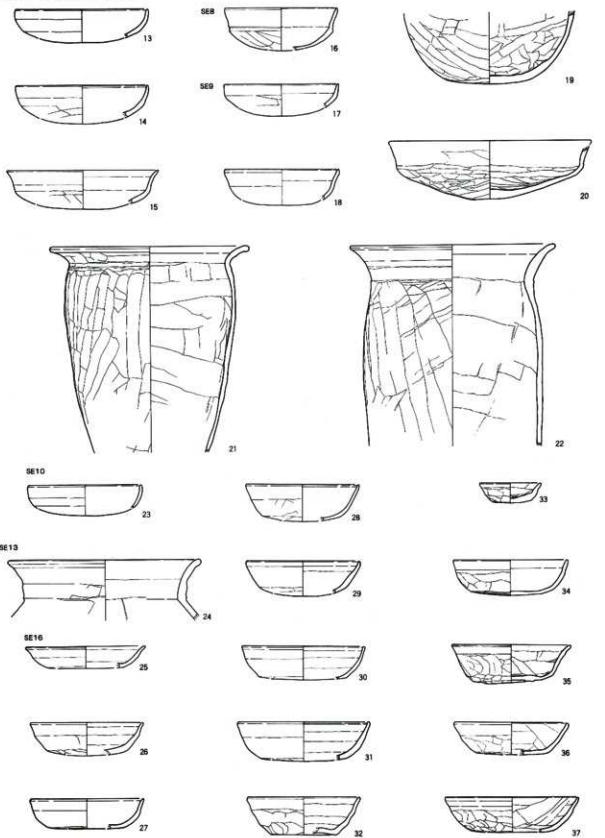
第24号井戸跡は、A-19グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径1.00m、短径0.88m、深さ1.27mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器環が検出された(第376図69)。69は丸底形態の北武蔵型環である。時期は8世紀初頭頃であらう。

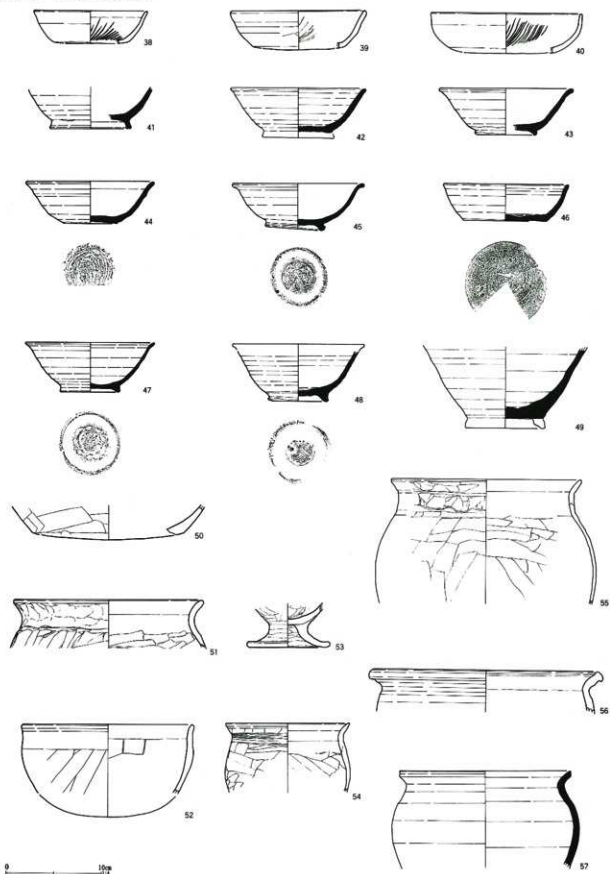
第25号井戸跡 (第372図)

第25号井戸跡は、B-20グリッドに位置し、第56号住居跡を切っていた。平面形態は楕円形である。規模は長径1.40m、短径1.34m、深さ1.11mを測り、漏斗状

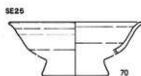
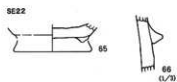
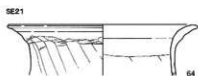
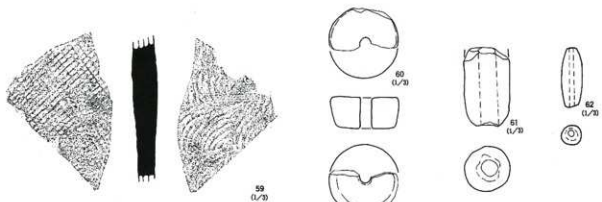
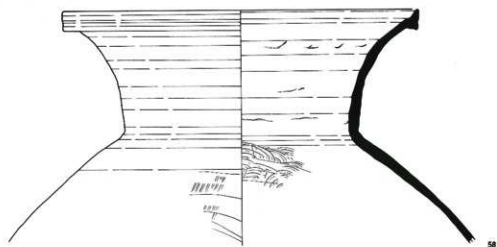
第374図 井戸跡出土遺物(2)



第375图 井戸跡出土遺物(3)



第376図 井戸跡出土遺物(4)



第167表 井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	挽成	色調	残存率	備考
1	須恵蓋	9.0	3.2		EH	1	灰	80	SE2 最下層湖西産
2	坏	12.0	3.0		AEH	1	橙	50	SE2 最下層
3	坏	(12.0)	3.2		DEH	2	にぶい赤褐	15	SE3 内面有機物付着
4	碗	(14.0)	4.6		ADEH	2	橙	20	SE4
5	坏	(9.8)	2.7		DEH	2	橙	20	SE5
6	坏	(9.8)	3.3		AEGH	2	橙	45	SE5
7	坏	(12.0)	2.1		DEH	2	にぶい橙	5	SE5
8	坏	(11.0)	2.0		DEH	2	にぶい褐	5	SE6 内面放射暗文
9	坏	(12.0)	2.9		DEH	2	橙	5	SE6
10	坏	(12.0)	2.8		DEH	2	橙	25	SE7
11	坏	12.8	3.2		ADEH	2	橙	75	SE7
12	須恵甕		23.6		EHIJ	1	灰	30	SE7 平行叩き青海波当て具末野産
13	坏	(14.0)	3.0		DEH	2	橙	15	SE7
14	坏	(14.0)	3.4		ADEH	2	にぶい赤褐	10	SE7
15	皿	(16.0)	3.5		ADEJ	2	にぶい橙	10	SE7
16	坏	(11.8)	4.4		ADEHJ	2	橙	15	SE8
17	坏	(12.0)	2.4		DEH	2	にぶい赤褐	10	SE9
18	坏	(12.0)	3.2		DEH	2	にぶい橙	10	SE9
19	小型壺		7.5	9.0	ADEHJ	1	明赤褐	45	SE9
20	坏		5.5		BDEH	1	にぶい褐	40	SE9
21	甕	21.1	21.5		ADEH	1	灰黄褐	50	SE9
22	甕	21.4	21.0		ADEH	1	橙	70	SE9
23	坏	(12.0)	2.4		ADEH	2	橙	10	SE10
24	甕	(20.0)	6.5		ABDEJ	3	にぶい橙	10	SE13
25	皿	(12.8)	2.2	(8.3)	BDE	2	黒褐	30	SE16 上層
26	坏	(12.0)	3.4	(8.4)	ADEH	2	にぶい橙	15	SE16 下層
27	坏	(12.0)	3.1	(8.0)	EHIJ	2	橙	20	SE16 上層
28	坏	(12.0)	3.7	(8.3)	ADEH	2	橙	15	SE16
29	坏	(12.0)	3.4		ADEH	2	にぶい橙	15	SE16 下層
30	坏	(13.0)	3.4	(9.4)	DEH	2	橙	20	SE16 下層
31	坏	(14.0)	3.9	(9.0)	ADEH	2	橙	20	SE16 下層
32	坏	(12.0)	4.0	(7.0)	ADE	2	にぶい褐	35	SE16 底面
33	ミニチュア	(6.5)	2.1	(3.7)	ADE	2	にぶい黄橙	65	SE16 上層
34	坏	(12.0)	3.7	(8.6)	ADEH	1	橙	40	SE16 覆土
35	坏	12.6	4.0		ABDEH	1	にぶい赤褐	90	SE16 下層 底部直径4cmの円形に窪み 無調整
36	坏	(12.0)	3.4		ADE	2	にぶい橙	25	SE16 底面
37	坏	(14.0)	3.7		ABH	1	にぶい橙	25	SE16
38	坏	(12.0)	3.4	(7.8)	DEH	2	にぶい橙	15	SE16 内面放射暗文
39	坏	(14.0)	3.9	(9.8)	ADE	2	橙	5	SE16 内面放射暗文
40	碗	(16.0)	4.1		ADEH	2	橙	15	SE16 上層・底面 内面放射暗文
41	須恵高台碗		4.3	8.4	BEHIJ	1	灰	60	SE16 下層 末野産
42	須恵高台碗	(14.2)	4.6		EHI	2	灰白	30	SE16 末野産
43	須恵高台碗	(14.4)	4.9	(6.6)	IJ	3	灰	20	SE16 下層 末野産
44	須恵坏	13.4	4.4	5.6	AEHJ	2	灰	55	SE16 中層・下層 末野産
45	須恵高台碗	14.0	4.8	6.4	EHIJ	3	灰	75	SE16 上層・中層 末野産
46	須恵坏	(13.1)	3.8	8.6	BFH	1	灰	40	SE16 南北企産 底部全面回転ヘラケズリ
47	須恵高台碗	(13.6)	5.2	6.4	BHIJ	2	灰	45	SE16 下層 末野産
48	須恵高台碗		5.2	6.4	ADHIJ	3	褐灰	30	SE16 上層 末野産
49	須恵長頸壺		7.5		BDIJ	1	灰	35	SE16 中層 末野産?
50	壺		3.1	(16.0)	ADE	2	明赤褐	30	SE16 上層
51	甕	(20.0)	5.1		ABEH	1	にぶい褐	30	SE16 上層
52	鉢	(18.0)	7.2		ADEH	2	橙	15	SE16

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
53	台付甕		4.6	(8.8)	DEHJ	1	橙	55	SE16 下層
54	小型甕	(13.0)	7.2		DEH	1	にぶい褐	25	SE16 下層
55	甕	(20.0)	13.0		ABDEH	1	橙	15	SE16
56	甕	(23.7)	4.4		ABEIJ	1	にぶい赤褐	25	SE16 底面
57	須恵鉢	(18.0)	10.2		BEIJ	2	灰	15	SE16 上層 末野産
58	須恵甕	38.0	24.7		BEHJJ	1	灰	80	SE16 中層 末野産
59	須恵甕				BEIJ	1	灰	破片	SE16 末野産 格子叩き 青海波当て具
60	土製紡績車	上径5.4cm	下径4.5cm	孔径0.8cm	厚さ2.5cm	重量44.49g	AEH2	橙	SE16 下層
61	土鉢	長(6.1)cm	最大径3.6cm	孔径1.25cm	重量75.68g	ADEH2	橙	SE16 上層	
62	土鉢	長4.1cm	最大径1.6cm	孔径0.4cm	重量11.19g	EH1	褐灰	SE16 上層	
63	杯	(13.0)	3.7		DEH	2	橙	15	SE18
64	甕	(20.0)	5.3		ABEJ	2	にぶい橙	20	SE21
65	高台碗		1.9		ADEH	2	橙	60	SE22 ロクロ土師器 内黒+ミダキ?
66	羽釜				ADEJ	1	にぶい赤褐	破片	SE22 土師黄 赤ロクロ整形
67	杯	(12.0)	3.3		ADEH	2	灰褐	15	SE23
68	須恵杯	(13.0)	3.7	(9.0)	BEJ	1	灰白	10	SE23 秋田産 底面へラ切り SJ100と混合
69	杯	(14.0)	3.7		ADE	2	橙	5	SE24
70	高台碗	(14.2)	3.4		ADE	1	明赤褐	10	SE25 ロクロ土師器
71	杯	(12.0)	2.6		AEH	3	橙	5	SE26
72	杯	(12.0)	3.8		AEH	2	にぶい橙	25	SE27 最下層
73	杯	11.6	3.4		ADEH	2	橙	80	SE27
74	杯	12.0	3.8		ADH	1	橙	70	SE27 最下層

に掘り込まれていた。

出土遺物はロクロ土師器高台碗がある(第376図70)。高台碗は重複する第56号住居跡からの混入の可能性がある。時期は10世紀後半以降となる。

第26号井戸跡(第372図)

第26号井戸跡は、E・F-16グリッドに位置し、重複する第27号住居跡に切られていた。平面形態は楕円形である。規模は長径0.44m、短径0.39m、深さ1.14mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器模倣坏がある(第376図71)。細片で時期は不明確であるが、おおよそ7世紀前半中心か。

第27号井戸跡(第372図)

第27号井戸跡は、E-16グリッドに位置し、第28号住居跡に切られていた。平面形態は楕円形である。規模は長径0.51m、短径0.42m、深さ1.34mを測り、筒状に掘り込まれていた。

出土遺物は土師器模倣坏が3点検出された(第376図72~74)。時期は7世紀前半であろう。

第28号井戸跡(第372図)

第28号井戸跡は、E-16グリッドに位置し、第29号

住居跡に切られていた。平面形態は円形である。規模は直径0.39m、深さ0.91mを測り、筒状に掘り込まれていた。出土遺物は検出されなかった。

第29号井戸跡(第372図)

第29号井戸跡は、D-19グリッドに位置する。平面形態は楕円形である。規模は長径0.48m、短径0.46m、深さ0.96mを測り、筒状に掘り込まれていた。出土遺物は検出されなかった。

第30号井戸跡(第372図)

第30号井戸跡は、C-20グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は直径0.40m、深さ1.06mを測り、筒状に掘り込まれていた。出土遺物は検出されなかった。

第31号井戸跡(第372図)

第31号井戸跡は、C-20グリッドに位置する。平面形態は円形である。規模は直径0.32m、深さ1.00mを測り、筒状に掘り込まれていた。出土遺物は検出されなかった。

第32号井戸跡(第372図)

第32号井戸跡は、G-14グリッドに位置する。平面

形態は方形である。規模は長径0.70m、短径0.65m、深さ1.48mを測り、筒状に掘り込まれていた。

(5) 土壌

大寄遺跡II区（今年度報告分）から検出された土壌は87基である。土壌の時期は古墳時代中期が1基、奈良時代が8基、奈良時代以降が14基、平安時代が6基、平安時代以降が6基、不明が50基である。以下各土壌について述べる。

第1号土壌（第377図）

第1号土壌は、Z・Z・A-18グリッドに位置し、上面に第37号住居跡が確認されている。

平面形態は東西が調査区域外のため推定ではあるが、方形ないし長方形である。規模は長径3.04m、深さ0.54mを測る。側面はオーバーハングしており、底面は凹凸しているが、中心に向けて緩やかに傾斜している。

出土遺物は土師器・高坏・小型壺・台付甕・壺（第380図1-12）が出土している。1-4は混入と思われる。5-12は和泉式の土器である。5は、高坏の坏部下半から脚部にかけて残存する。坏部外面下半は横方向にヘラケズリ、脚柱部外面はヘラミガキ、坏部内面はミガキ、脚柱部内面はナデが施されている。6は高坏の脚部で、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施されている。7は小型壺の胴部で、外面はヘラナデ、内面はナデが施されている。8は台付甕の底部から脚部にかけて、底部外面の一部と脚部内面に刷毛目、脚部外面と底部内面にナデが施されている。9は壺で、口縁部はヨコナデ、胴部は横方向のヘラケズリが施されている。10-12は壺の底部で、10の胴部外面下半は刷毛目、底部はナデが、11の胴部外面下半はヘラケズリとナデで、底部がヘラケズリ、12の胴部外面下半と底部に刷毛目が、それぞれ施されている。

時期は古墳時代中期である。

第2号土壌（第377図）

第2号土壌は、A-18グリッドに位置し、第3号土壌を切っている。

井戸中層から礫がまとまって出土している。

平面形態は円形で、規模は長径1.33m、短径1.28m、深さ0.38mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は第3号土壌との関係から10世紀後半～11世紀、またはそれ以降である。

第3号土壌（第377図）

第3号土壌は、A・B-18グリッドに位置する。第46・47号住居跡を切り、第2号土壌に切られている。

平面形態は長方形で、土壌内北側にピット状の掘り込みがある。規模は長径2.55m、短径1.36m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-2°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

時期は、第47号住居跡との関係から10世紀後半～11世紀、またはそれ以降となる。

第4号土壌（第377図）

第4号土壌は、B-18グリッドに位置し、第48・75号住居跡を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.88m、短径1.04m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-1°-Wを示す。出土遺物はなかった。

時期は、第48号住居跡との関係から7世紀後半～末頃、またはそれ以降となる。

第5号土壌（第377図）

第5号土壌は、B-17グリッドに位置する。

平面形態は北西が調査区域外のため推定ではあるが、円形である。規模は長径0.74m、短径0.40m（現在長）、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなかった。

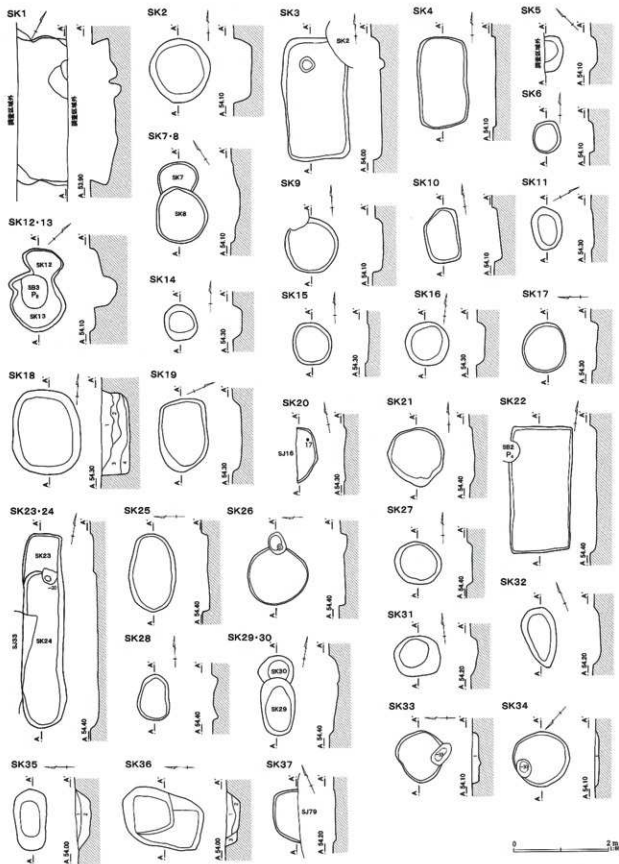
第6号土壌（第377図）

第6号土壌は、B-18グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.66m、短径0.60m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第377团 土壤(I)



第7号土壌 (第377図)

第7号土壌は、B-17グリッドに位置し、第8号土壌に切られている。

平面形態は推定で円形、規模は長径0.84m、短径0.51m (現在長)、深さ0.11mを測る。

出土遺物はなかった。

第8号土壌 (第377図)

第8号土壌は、B-17グリッドに位置し、第7号土壌を切っている。

平面形態は円形で、規模は長径1.16m、短径1.09m、深さ0.20mを測る。断面は中心に向かって緩やかに傾斜している。

出土遺物はなかった。

第9号土壌 (第377図)

第9号土壌は、B-17グリッドに位置し、ピットと重複している。

平面形態は円形で、規模は長径1.14m、短径1.13m、深さ0.23mを測る。

出土遺物はなかった。

第10号土壌 (第377図)

第10号土壌は、C-18グリッドに位置し、第65号住居跡を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.12m、短径0.72m、深さ0.15mを測る。主軸方向はN-6°-Eを示す。断面は北に向かって傾斜している。

出土遺物はなかった。

時期は、第65号住居跡との関係から7世紀後半～末頃またはそれ以降となる。

第11号土壌 (第377図)

第11号土壌は、C-16グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.87m、短径0.64m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-62°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第12号土壌 (第377図)

第12号土壌は、B-17グリッドに位置し、第13号土壌を切っている。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.84m、短径0.56

m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-56°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

時期は、第13号土壌との関係から7世紀後半またはそれ以降となる。

第13号土壌 (第377図)

第13号土壌は、B-17グリッドに位置する。第3号掘立柱建物跡ピット8を切り、第12号土壌に切られている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.30m、短径1.07m、深さ0.11mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は、第3号掘立柱建物跡との関係から7世紀後半またはそれ以降となる。

第14号土壌 (第377図)

第14号土壌は、C-16グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.73m、短径0.68m、深さ0.19mを測る。

出土遺物はなかった。

第15号土壌 (第377図)

第15号土壌は、D-17グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.86m、短径0.82m、深さ0.08mを測る。

出土遺物は土師器皿(第380図13)が出土した。時期は不明確であるが、遺物が伴うとすれば8世紀前半である。

第16号土壌 (第377図)

第16号土壌は、C-16グリッドに位置し、第57号住居跡を切っている。

平面形態は円形で、規模は径0.92m、深さ0.17mを測る。

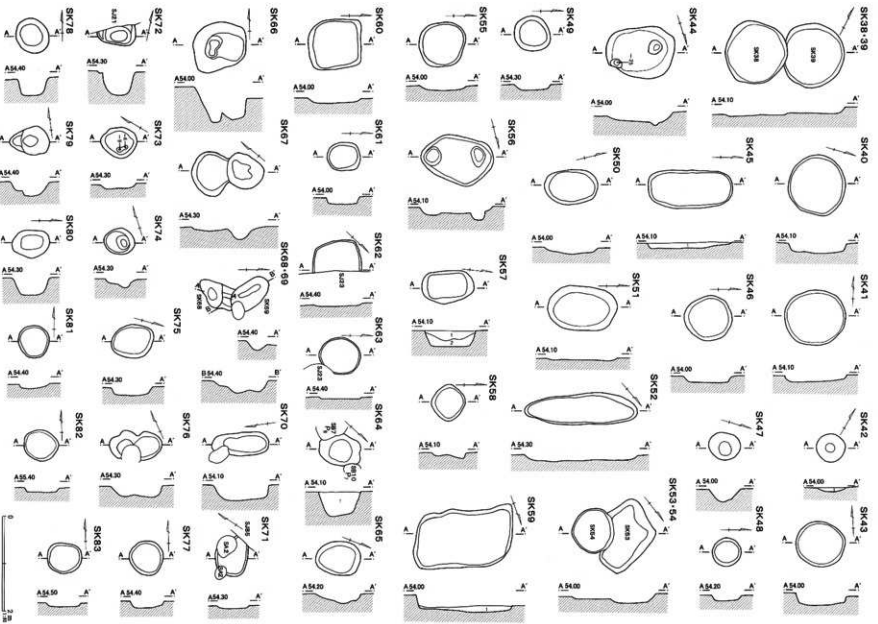
遺物は土師器環(第380図14)小片が出土した。時期は不明確である。

第17号土壌 (第377図)

第17号土壌は、E-15グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.02m、短径0.92m、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。



第18号土墳 (第377図)

第18号土墳は、C-16グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.74m、短径1.42m、深さ0.63mを測る。主軸方向はN-3°-Wを示す。土層は4層に分けられ、自然堆積である。

出土遺物はロクロ土師器高台椀と須恵器環 (第380図15・16) が出土している。15は内面にミガキが施されている。16の底部は回転糸切り離してある。

第19号土墳 (第377図)

第19号土墳は、D-16グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.49m、短径1.03m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-66°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第20号土墳 (第377図)

第20号土墳は、F-14・15グリッドに位置し、第16号住居跡を切っている。

平面形態はおそらく楕円形で、規模は長径1.14m、短径0.42m (現在長)、深さ0.07mを測る。底面は中央が盛り上がっている。

出土遺物はロクロ土師器小皿 (第380図17) が底面から出土している。

時期は10世紀後半～11世紀頃と考えられる。

第21号土墳 (第377図)

第21号土墳は、F-14グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は径1.20m、深さ0.11mを測る。底面は凹凸している。

出土遺物はなかった。

第22号土墳 (第377図)

第22号土墳は、G-14グリッドに位置し、第2号掘立柱建物跡ピット4を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径2.60m、短径1.32m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-6°-Wを示す。出土遺物はなかった。

第23号土墳 (第377図)

第23号土墳は、G-14グリッドに位置し、土塙北側で第24号土墳と重複している。新旧関係は不明である。

平面形態は方形で、規模は長径0.96m (現在長)、短

径0.81m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN-10°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第24号土墳 (第377図)

第24号土墳は、G・H-14グリッドに位置する。第23号土墳と重複し、第33号住居跡を切っている。

平面形態は長方形で、第23号土墳との境にピット状の掘り込みを持つ。規模は長径3.26m、短径0.94m、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-10°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

時期は、第33号住居跡との関係から10世紀後半またはそれ以降とろう。

第25号土墳 (第377図)

第25号土墳は、H-14グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.62m、短径1.00m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。底面は中央が盛り上がっている。

出土遺物はなかった。

第26号土墳 (第377図)

第26号土墳は、H-14グリッドに位置し、土塙東側がピットと重複している。

平面形態は円形で、規模は長径1.26m、短径1.04m (現在長)、深さ0.14mを測る。

出土遺物はなかった。

第27号土墳 (第377図)

第27号土墳は、H-14グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.00m、短径0.90m、深さ0.13mを測る。

出土遺物はなかった。

第28号土墳 (第377図)

第28号土墳は、G-15グリッドに位置する。

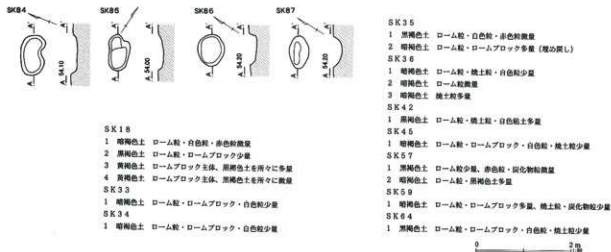
平面形態は楕円形で、規模は長径0.95m、短径0.70m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-1°-Eを示す。底面が極端に中央で盛り上がっている。

出土遺物はなかった。

第29号土墳 (第377図)

第29号土墳は、G-15グリッドに位置し、第30号土

第379図 土壌(3)



壤を切っている。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.20m、短径0.70m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-8°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第30号土壌 (第377図)

第30号土壌は、G-15グリッドに位置し、土壌南側を第29号土壌に切られている。

平面形態はおそらく円形で、規模は長径0.75m、短径0.69m (推定)、深さ0.16mを測る。

出土遺物はなかった。

第31号土壌 (第377図)

第31号土壌は、D-15グリッドに位置し、第6号住居跡を切っている。

平面形態は円形で、規模は長径1.00m、短径0.85m、深さ0.16mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は、第6号住居跡との関係から10世紀後半～11世紀、またはそれ以降となろう。

第32号土壌 (第377図)

第32号土壌は、D-15グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.28m、短径0.72m、深さ0.16mを測る。主軸方向はN-10°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第33号土壌 (第377図)

第33号土壌は、B-18・19グリッドに位置する。第43号住居跡を切り、ピットと重複する。

平面形態は円形で、規模は長径1.09m、短径1.05m、深さ0.15mを測る。覆土は単層で、中央に窪みがみられる。

出土遺物はなかった。

時期は、第43号住居跡との関係から10世紀後半またはそれ以降となろう。

第34号土壌 (第377図)

第34号土壌は、B-19グリッドに位置し、第53号住居跡を切っている。

平面形態は円形で、土壌内の北側にピット状の掘り込みがある。規模は長径1.21m、短径1.16m、深さ0.08mを測る。覆土は単層である。

出土遺物はなかった。

時期は第53号住居跡との関係から7世紀前半またはそれ以降となろう。

第35号土壌 (第377図)

第35号土壌は、B-19グリッドに位置する。調査時には、第53・54号住居跡を切っていると判断したが、第54号住居跡に付属する土壌の可能性も考えられる。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.26m、短径0.68m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-90°-Eを示す。覆土は2層に分けられる。

出土遺物は鉄鏃が2点(第388図11・12)出土した。時期は10世紀後半～11世紀またはそれ以降となろう。

第36号土墳(第377図)

第36号土墳は、A-18・19グリッドに位置し、第38・39・49号住居跡を切っている。

平面形態は長方形で、北側が若干深くなっている。規模は長径1.77m、短径1.14m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-16°-Eを示す。断面をみると、一度埋没した後、北側を再度掘り込んでいることが確認できる。3層には焼土粒が多量に含まれている。

出土遺物は土師器環(第380図18-20)が出土している。18は第39号住居跡に伴うものか。19は本土墳に伴う可能性がある。時期は不明確ながら、8世紀後半代であろうか。

第37号土墳(第377図)

第37号土墳は、C-18グリッドに位置し、土壇東側を第79号住居跡に切られている。

平面形態はおそらく方形で、規模は長径1.10m、短径0.54m(現在長)、深さ0.06mを測る。

出土遺物は土師器模倣環(第380図21)が出土した。時期は不明確であるが、遺物が伴うとすれば7世紀後半頃であろうか。

第38号土墳(第378図)

第38号土墳は、C-19グリッドに位置し、第39号土壇と第78号住居跡を切っている。

平面形態は円形で、規模は長径1.32m、短径1.31m、深さ0.07mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は第78号住居跡との関係から10世紀後半～11世紀またはそれ以降となろう。

第39号土墳(第378図)

第39号土墳は、C-19グリッドに位置し、西側を重複する第38号土壇に切られている。

平面形態は円形で、規模は長径1.36m、短径1.18m(現在長)、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は、第38号土壇との関係から10世紀後半～11世

紀またはそれ以降となろう。

第40号土墳(第378図)

第40号土墳は、C-19グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.28m、短径1.20m、深さ0.20mを測る。

出土遺物は、内面にミガキが施されたロクロ土師器高台椀(第380図22)が出土している。時期は、出土遺物が伴うとすれば10世紀後半～11世紀頃であろう。

第41号土墳(第378図)

第41号土墳は、C-19グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.28m、短径1.18m、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。

第42号土墳(第378図)

第42号土墳は、B-19グリッドに位置する。第42号住居跡カマド前面の堀り方の一部の可能性が高い。

平面形態は円形で、規模は径0.60m、深さ0.08mを測る。

出土遺物はなかった。

第43号土墳(第378図)

第43号土墳は、A・B-19グリッドに位置し、第51号住居跡を切っている。

平面形態は円形で、規模は長径1.04m、短径0.96m、深さ0.23mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は、第51号住居跡との関係から8世紀前半またはそれ以降となろう。

第44号土墳(第378図)

第44号土墳は、A・B-19グリッドに位置し、第51・52号住居跡を切っている。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.45m、短径1.10m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-71°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

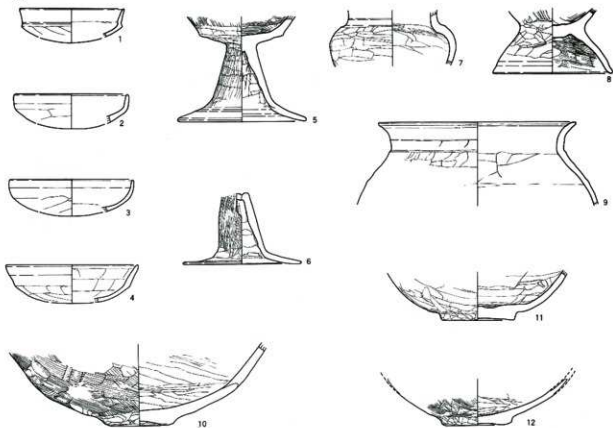
時期は、第51号住居跡との関係から8世紀前半またはそれ以降となろう。

第45号土墳(第378図)

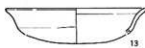
第45号土墳は、D-19グリッドに位置し、第112・113

第380图 土坑出土遗物

SK1



SK15



SK36



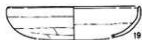
SK51



SK16



SK66



SK57



SK18



SK37



SK59



SK37



SK70



SK20



SK40



第168表 土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(11.0)	3.0		A E H	2	橙	20	SK1
2	環	(12.0)	3.0		A E H	2	明赤褐	10	SK1
3	環	(13.0)	3.4		D E H	2	橙	10	SK1
4	環	(14.0)	3.9		A D E H	2	にぶい橙	25	SK1
5	高環		11.0	(13.2)	D H	1	にぶい橙	40	SK1
6	高環		7.5	12.4	D E H	1	明赤褐	95	SK1
7	小型壺		5.8		D E	1	橙	35	SK1
8	台付甕		5.8	(12.6)	D E H J	1	にぶい橙	50	SK1
9	壺	(21.0)	8.8		A B J	1	浅黄橙	20	SK1
10	壺		8.3	7.4	D H	1	明褐	30	SK1
11	壺		5.2	7.6	A B H J	2	にぶい黄橙	35	SK1
12	壺		4.9	6.6	D H	1	明赤褐	30	SK1 底部内面黒色処理
13	皿	(15.0)	2.7		D E H	2	橙	5	SK15
14	環	(11.0)	2.4		A D E	2	橙	20	SK16
15	高台椀		3.3		A D E J	1	明赤褐	25	SK18 ロクロ土師器 内面ミガキ
16	須恵環		1.6	(6.6)	A E I	2	にぶい褐	35	SK18 木野産
17	小皿	(10.0)	2.7	(5.6)	D E H	2	明赤褐	25	SK20 No45 ロクロ土師器 底部糸切り
18	環	(13.0)	3.3		A E	2	明赤褐	40	SK36
19	環	(14.0)	3.3		A D E H	2	橙	20	SK36
20	環	(11.0)	3.7		E H	2	にぶい黄橙	20	SK36
21	環	(12.0)	2.8		A D E H	2	橙	5	SK37
22	高台椀		1.7		A D E	2	橙	30	SK40 ロクロ土師器 内面ミガキ
23	小型甕	(12.8)	4.5		A D E	2	灰褐	15	SK51
24	環	(12.4)	3.5		A D E	2	橙	20	SK57 内面にヘラ記号?
25	環	(11.8)	2.6		A E H	2	橙	10	SK59
26	環	(12.0)	2.2		D E H	2	橙	5	SK70

号住居跡を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.75m、短径0.80m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-0°を示す。覆土は単層である。

出土遺物はなかった。

時期は、第112・113号住居跡との関係から8世紀前半またはそれ以降となろう。

第46号土坑 (第378図)

第46号土坑は、B-19グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径1.00m、短径0.95m、深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。

第47号土坑 (第378図)

第47号土坑は、C-18グリッドに位置する。第78号住居跡 Pit 1 に変更した。

平面形態は円形で、規模は長径0.66m、短径0.59m、深さ0.24mを測る。

出土遺物はロクロ土師器高台椀(第326図18)と鉄器が出土している。

第48号土坑 (第378図)

第48号土坑は、E-19グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.61m、短径0.60m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第49号土坑 (第378図)

第49号土坑は、F-15グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.80m、短径0.73m、深さ0.11mを測る。

出土遺物はなかった。

第50号土坑 (第378図)

第50号土坑は、B-20・21グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.10m、短径0.71m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-14°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第51号土壌 (第378図)

第51号土壌は、C-20グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.45m、短径0.93m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

遺物は土師器小型甕(第380図23)が出土している。胴部外面には、横方向にヘラケズリが施されている。

第52号土壌 (第378図)

第52号土壌は、D-15グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径2.35m、短径0.68m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-38°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第53号土壌 (第378図)

第53号土壌は、E-20グリッドに位置する。土壌南西を第54号土壌に切られている。

平面形態はおそらく長方形で、規模は長径1.36m、短径1.04m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-80°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第54号土壌 (第378図)

第54号土壌は、E-20グリッドに位置する。第53号土壌を切っている。

平面形態は円形で、規模は長径0.97m、短径0.92m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第55号土壌 (第378図)

第55号土壌は、E・F-20グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.98m、短径0.94m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第56号土壌 (第378図)

第56号土壌は、F-19グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、土壌内の両端にピット状の掘り込みがある。規模は長径1.50m、短径1.02m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-75°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第57号土壌 (第378図)

第57号土壌は、C-19グリッドに位置し、第7号掘

立柱建物跡 Pit 8 を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長径1.06m、短径0.70m、深さ0.33mを測る。主軸方向はN-5°-Wを示す。土層は2層に分けられる。

出土遺物は土師器環(第380図24)が出土している。環は北武藏型環で、体部内面に「#」状のヘラ描(線刻)がある。遺物は土壌に伴うものではなからう。

第58号土壌 (第378図)

第58号土壌は、D-19グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.79m、短径0.72m、深さ0.12mを測る。底面は中央が盛り上がっている。

出土遺物はなかった。

第59号土壌 (第378図)

第59号土壌は、B-18グリッドに位置する。第42号住居跡の埋り方の可能性が高い。

平面形態は長方形で、規模は長径1.98m、短径1.24m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-70°-Wを示す。

遺物は土師器環(第380図25)が出土している。

第60号土壌 (第378図)

第60号土壌は、B-18グリッドに位置し、第75号住居跡を切っている。

平面形態は方形で、規模は長径1.09m、短径1.05m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-0°を示す。

出土遺物はなかった。

時期は、第75号住居跡との関係から7世紀前半〜中頃またはそれ以降とならう。

第61号土壌 (第378図)

第61号土壌は、D-18グリッドに位置し、第113号住居跡を切っている。

平面形態は円形で、規模は長径0.70m、短径0.61m、深さ0.13mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は第113号住居跡との関係から8世紀前半またはそれ以降とならう。

第62号土壌 (第378図)

第62号土壌は、G-15グリッドに位置し、第23号住

居跡を切っている。

平面形態はおそらく方形で、規模は長径1.00m、短径0.62m（現在長）、深さ0.04mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は第23号住居跡との関係から7世紀後半またはそれ以降となろう。

第63号土壇（第378図）

第63号土壇は、F-14グリッドに位置し、第23号住居跡を切っている。

平面形態は円形で、規模は長径0.86m、短径0.78m、深さ0.05mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は第23号住居跡との関係から7世紀後半またはそれ以降となろう。

第64号土壇（第378図）

第64号土壇は、C-19グリッドに位置する。第7・10号掘立柱建物跡を切っている。

平面形態は不整形で、規模は長径0.85m、短径0.66m、深さ0.50mを測る。主軸方向はN-44°-Wを示す。覆土は黒褐色土の単層である。

出土遺物はなかった。

第65号土壇（第378図）

第65号土壇は、C-16グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.92m、短径0.72m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-21°-Wを示す。底面は凸凹がある。

出土遺物はなかった。

第66号土壇（第378図）

第66号土壇は、A-18グリッドに位置し、第39号住居跡を切っている。

平面形態は不整形で、規模は長径1.26m、短径1.08m、深さ0.76mを測る。主軸方向はN-86°-Eを示す。断面は掘り込みが2つ確認できる。

出土遺物はなかった。

時期は第39号住居跡との関係から8世紀初頭またはそれ以降となろう。

第67号土壇（第378図）

第67号土壇は、D-14グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、円形の土壇が2基重複している。規模は長径1.52m、短径0.94m、深さは深い方で0.30m、浅い方で0.10mを測る。主軸方向はN-40°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第68号土壇（第378図）

第68号土壇は、G-15グリッドに位置し、第69号土壇に切られている。

平面形態は不整形で、規模は長径0.72m（現在長）、短径0.52m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-16°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第69号土壇（第378図）

第69号土壇は、G-15グリッドに位置し、第68号土壇を切っている。また、ピットと重複している。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.90m、短径0.54m、深さ0.26mを測る。主軸方向はN-45°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第70号土壇（第378図）

第70号土壇は、C-18グリッドに位置し、ピットと重複する。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.20m、短径0.50m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-9°-Eを示す。

出土遺物は土師器環（第380図26）が出土している。小片であり、遺構に伴う保証はない。

第71号土壇（第378図）

第71号土壇は、D-17グリッドに位置し、第85号住居跡・第2号柵列跡に切られている。

平面形態はおそらく円形で、規模は長径0.84m、短径0.68m、深さ0.08mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は第85号住居跡との関係から10世紀後半～11世紀またはそれ以降となろう。

第72号土壇（第378図）

第72号土壇は、E-15グリッドに位置し、第21号住居跡を切っている可能性が¹ある。

平面形態は円形で、規模は長径0.78m、短径0.40m
(現在長)、深さ0.50mを測る。

出土遺物はなかった。

時期は第21号住居跡との関係から7世紀後半またはそれ以降となろう。

第73号土壌 (第378図)

第73号土壌は、E-16グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.78m、短径0.66m、深さ0.12mを測る。土壌内東に小さい掘り込みがみられる。

出土遺物はなかった。

第74号土壌 (第378図)

第74号土壌は、G-16グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.66m、短径0.56m、深さ0.22mを測る。断面は段を有している。

出土遺物はなかった。

第75号土壌 (第378図)

第75号土壌は、D-16グリッドに位置する。第22号住居跡に伴う張り出し状施設の可能性が高い。

平面形態は円形で、規模は長径0.88m、短径0.70m、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなかった。

第76号土壌 (第378図)

第76号土壌は、E-15グリッドに位置し、ピットと重複する。

平面形態は不整形で、規模は長径1.10m、短径0.60m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-66°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

第77号土壌 (第378図)

第77号土壌は、G-15グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は径0.70m、深さ0.16mを測る。

出土遺物はなかった。

第78号土壌 (第378図)

第78号土壌は、G-15グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.76m、短径0.68m、深さ0.36mを測る。

出土遺物はなかった。

第79号土壌 (第378図)

第79号土壌は、G-15グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.84m、短径0.58m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN-82°-Wを示す。断面は西側が1段低くなっている。

出土遺物はなかった。

第80号土壌 (第378図)

第80号土壌は、G-15グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.80m、短径0.60m、深さ0.38mを測る。

出土遺物はなかった。

第81号土壌 (第378図)

第81号土壌は、G-15グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.70m、短径0.66m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第82号土壌 (第378図)

第82号土壌は、G-15グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.72m、短径0.66m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第83号土壌 (第378図)

第83号土壌は、F・G-14グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.74m、短径0.66m、深さ0.10mを測る。

出土遺物はなかった。

第84号土壌 (第379図)

第84号土壌は、D-20グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径0.84m、短径0.50m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-71°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

第85号土壌 (第379図)

第85号土壌は、A・B-20グリッドに位置する。

平面形態は不整形で、規模は長径0.76m、短径0.44m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-28°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

大審Ⅱ区

第169表 大審Ⅱ区土壤一覽表

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重複	備考
1	Z Z・A-18	3.04		0.54		方形or長方形		古墳中期
2	A-18	1.33	1.28	0.38		円形	SK 3	平安以降
3	A・B-18	2.55	1.36	0.30	N-2°-E	長方形	SJ46・47 SK 2	平安以降
4	B-18	1.88	1.04	0.10	N-1°-W	長方形	SJ48・75	奈良以降
5	B-17	0.74	0.40	0.18		円形		
6	B-18	0.66	0.60	0.10		円形		
7	B-17	0.84	0.51	0.11		楕円形	SK 8	
8	B-17	1.16	1.09	0.20		円形	SK 7	
9	B-17	1.14	1.13	0.23		円形		
10	C-18	1.12	0.72	0.15	N-6°-E	長方形	SJ65	奈良以降
11	C-16	0.87	0.64	0.06	N-62°-W	楕円形		
12	B-17	0.84	0.56	0.28	N-56°-E	楕円形	SK13	奈良以降
13	B-17	1.30	1.07	0.11		不整形	SK12 SB 3	奈良以降
14	C-16	0.73	0.68	0.19		円形		
15	D-17	0.86	0.82	0.08		円形		奈良
16	C-16	0.92	0.92	0.17		円形	SJ57	奈良
17	E-15	1.02	0.92	0.15		円形		
18	C-16	1.74	1.42	0.63	N-3°-W	楕円形		平安
19	D-16	1.49	1.03	0.19	N-66°-W	楕円形		
20	F-14・15	1.14	0.42	0.07		楕円形	SJ16	
21	F-14・15	1.20	1.20	0.11		円形		
22	G-14	2.60	1.32	0.16	N-6°-W	長方形	SB 2	
23	G-14	0.96	0.81	0.05	N-10°-W	正方形	SK24	
24	G・H-14	3.26	0.94	0.19	N-10°-W	長方形	SJ33 SK23	平安以降
25	H-14	1.62	1.00	0.16	N-90°-E	楕円形		
26	H-14	1.26	1.04	0.14		円形		
27	H-14	1.00	0.90	0.13		円形		
28	G-15	0.95	0.70	0.12	N-10°-E	楕円形		
29	G-15	1.20	0.70	0.17	N-8°-W	楕円形	SK30	
30	G-15	0.75	0.69	0.16		円形	SK29	
31	D-15	1.00	0.85	0.16		円形	SJ 6	平安以降
32	D-15	1.28	0.72	0.16	N-10°-E	楕円形		
33	B-18・19	1.09	1.05	0.15		円形	SJ43	平安以降
34	B-19	1.21	1.16	0.08		円形	SJ53	奈良以降
35	B-19	1.26	0.68	0.34	N-90°-E	楕円形	SJ53・54	平安
36	A-18・19	1.77	1.14	0.28	N-16°-E	長方形	SJ38・39・49	奈良
37	C-18	1.10	0.54	0.06		方形	SJ79	奈良
38	C-19	1.32	1.31	0.07		円形	SK39 SJ78	平安以降
39	C-19	1.36	1.18	0.18		円形	SK38	平安
40	C-19	1.28	1.20	0.20		円形		平安
41	C-19	1.28	1.18	0.15		円形		
42	B-19	0.60	0.60	0.08		円形		
43	A・B-19	1.04	0.96	0.23		円形	SJ51	奈良以降
44	A・B-19	1.45	1.10	0.25	N-71°-W	楕円形	SJ51・52	奈良以降
45	D-19	1.75	0.80	0.13	N-0°	長方形	SJ112・113	奈良以降
46	B-19	1.00	0.95	0.15		円形		
47	C-18	0.66	0.59	0.24		円形		SJ78 P 1に変更
48	E-19	0.61	0.60	0.10		円形		
49	F-15	0.80	0.73	0.11		円形		
50	B-20・21	1.10	0.71	0.14	N-14°-E	楕円形		
51	C-20	1.45	0.93	0.06	N-0°	楕円形		
52	D-15	2.35	0.68	0.10	N-38°-W	楕円形		

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	重複	備考
53	E-20	1.36	1.04	0.18	N-80°-E	長方形	SK54	
54	E-20	0.97	0.92	0.10		円形	SK53	
55	E・F-20	0.98	0.94	0.10		円形		
56	F-19	1.50	1.02	0.14	N-75°-W	楕円形		
57	C-19	1.06	0.70	0.33	N-5°-W	長方形	SB 7	奈良
58	D-19	0.79	0.72	0.12		円形		
59	B-18	1.98	1.24	0.24	N-70°-W	長方形		奈良
60	B-18	1.09	1.05	0.11	N-0°	方形	SJ75	奈良以降
61	D-18	0.70	0.61	0.13		円形	SJ113	奈良以降
62	G-15	1.00	0.62	0.04		方形	SJ23	奈良以降
63	F-14	0.86	0.78	0.05		円形	SJ23	奈良以降
64	C-19	0.85	0.66	0.50	N-44°-W	不整形	SB 7・10	
65	C-16	0.92	0.72	0.20	N-21°-W	楕円形		
66	A-18	1.26	1.08	0.76	N-86°-E	不整形		奈良以降
67	D-14	1.52	0.94	0.30	N-40°-W	不整形		
68	G-15	0.72	0.52	0.22	N-16°-E	不整形	SK69	
69	G-15	0.90	0.54	0.26	N-45°-W	楕円形	SK68	
70	C-18	1.20	0.50	0.34	N-9°-E	楕円形		奈良
71	D-17	0.84	0.68	0.08		円形	SJ85 SA 2	平安
72	E-15	0.78	0.40	0.50		円形	SJ21	奈良以降
73	E-16	0.78	0.66	0.12		円形		
74	G-16	0.66	0.56	0.22		円形		
75	D-16	0.88	0.70	0.18		円形		
76	E-15	1.10	0.60	0.24	N-66°-W	不整形		
77	G-15	0.70	0.70	0.16		円形		
78	G-15	0.76	0.68	0.36		円形		
79	G-15	0.84	0.58	0.30	N-82°-W	楕円形		
80	G-15	0.80	0.60	0.38		円形		
81	G-15	0.70	0.66	0.10		円形		
82	G-15	0.72	0.66	0.10		円形		
83	F・G-14	0.74	0.66	0.10		円形		
84	D-20	0.84	0.50	0.14	N-71°-E	不整形		
85	A・B-20	0.76	0.44	0.12	N-28°-W	不整形		
86	G-16	0.66	0.56	0.18		円形		
87	H-15	0.70	0.44	0.20	N-57°-E	楕円形		

第86号土壌 (第379図)

第86号土壌は、G-16グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.66m、短径0.56m、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなかった。

第87号土壌 (第379図)

第87号土壌は、H-15グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.70m、短径0.44m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-57°-Eを示す。

出土遺物はなかった。

(6) 柵列跡

今回の報告対象区からは3条の柵列跡が検出された。

第1号柵列跡 (第381図)

第1号柵列跡は、D-17グリッドからG-17グリッドにかけてほぼ南北方向にピット群が列状に並ぶ。各

ピットは等間隔に配置されるものではなく、雑然としたまとまりの中で、南北方向に並ぶ形態である。

総延長約30m。大きく北群と南群に分かれる。両者はF-17グリッド北端で途切れる。約1.5m程の空間

地を境に軸線もやや食い違う。また、南群の南端は僅かではあるが、東に屈曲するようにも見て取れる。あるいは東西の区画施設となるかもしれない。

ピット内からの出土遺物は少ないが、土師器環、ロクロ土師器高台碗が検出されている(第381図1~4)。第381図1は丸底形態の土師器環で、Pit 1から出土した。2~4はロクロ土師器高台碗である。4は内面へラミガキと黒色処理が施されている。

出土遺物から柵列の時期は10世紀後半以降となる可能性が高い。柵列の東側には、ほぼ平行して住居跡群が南北に並んでいる。第85-88・96号住居跡は10世紀後半以降の住居跡群で、柵列の時期とはほぼ一致する。第1号柵列跡はこれらの住居跡群の西側を区画する施設とみて良からう。ピット群の重複あるいはまとまり状況から一定期間、建て替えながら機能していたものと推定される。

第2号柵列跡(第381図)

第2号柵列跡は、D-17・18グリッドに位置する。西端は第1号柵列跡に取り付き、東に約11m延びる。第85・86号住居跡と重複している。新旧関係は不明確であるが、柵列の方が新しい可能性がある。

柵列の軸方位はおよそN-94°Eを指し、第1号柵列跡に対して直角よりもやや角度が振れる。

ピット群はほぼ直線的に並び、ピット相互の重複は少ない。ピット間隔は一定せず、不規則な配置である。

出土遺物は土師器環と皿がある(第381図5・6)が、おそらく混入と思われる。第1号柵列跡が住居跡群を含むエリアの西側の区画施設とすれば、第2号柵列跡は住居跡群を南北に分割する区画施設と考えられる。但し、第85・86号住居跡と重複が認められることから、第1号柵列跡とはほぼ同時期とはいえ、微妙に存続期間が異なる可能性が高いであろう。

第3号柵列跡(第381図)

第3号柵列跡は、B-17グリッドにあるピット群を宛てた。軸方位はN-86°Eを指し、東西方向からやや北に振れている。西端は調査区外に延びる。

ピット間隔は一定せず、深さも異なる点は第1・2号柵列跡と同様である。

出土遺物は検出されなかったため、時期は不明確である。可能性としては第2号柵列跡同様、第1号柵列跡に取り付くと考えても良い位置関係にはある。やはり区画施設の一部とみるべきか。

第170表 柵列跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(14.0)	3.3		DEH	2	橙	10	SA1 Pit 1
2	高台碗	(16.0)	3.7		ADEGJ	2	にぶい黄橙	20	SA1 Pit 2 ロクロ土師器
3	高台碗	(15.0)	4.3		ADEH	2	にぶい褐	10	SA1 Pit 3 ロクロ土師器
4	高台碗		3.7	(8.4)	DE	2	明赤褐	65	SA1 Pit 4 ロクロ土師器 内面黒色+ミガキ
5	環	(13.0)	3.0		AEH	2	橙	10	SA2 Pit 1
6	皿	(17.0)	2.8		AEH	1	明赤褐	10	SA2 Pit 2

(7) 土壌墓

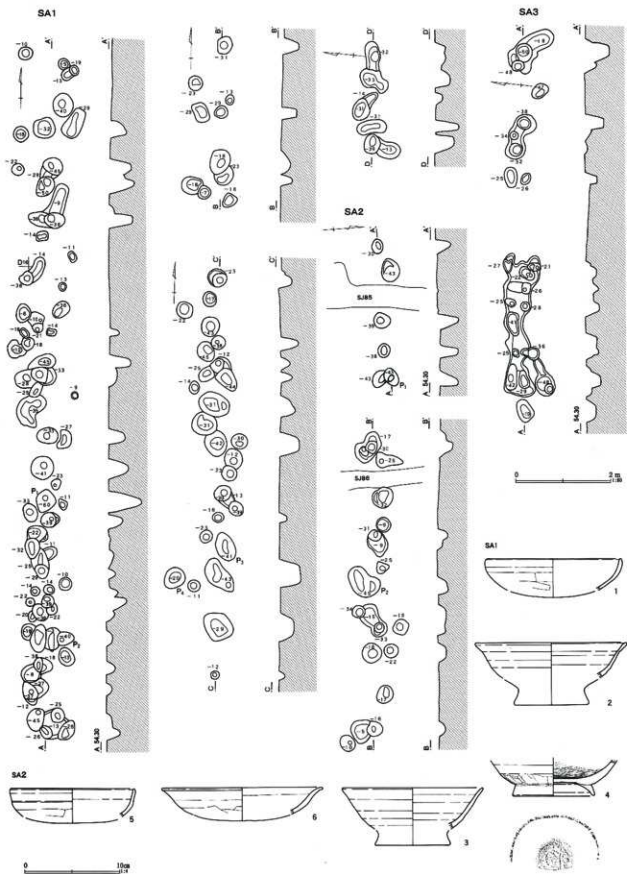
大寄遺跡II区では土壌墓が2基検出された。第118号住居跡内に掘り込まれた第1号土壌墓と第56号住居跡西壁際に位置する1号土壌墓がそれにあたる(第2号土壌墓)。後者については、住居に付属する土壌として扱ったため、第56号住居跡を参照願いたい。いずれも住居内に掘り込まれた土壌墓で、土器を副葬品にもつて共通する。廃屋墓と考えられる。

第1号土壌墓(第382図)

第1号土壌墓は、E-18グリッドに位置する。第118号住居跡床面の中央からやや北に寄った位置に掘り込まれていた。床面の遺存状況から第118号住居跡よりも新しいことが判明した。

形態は長方形で、規模は長軸長1.64m、短軸長0.45m、深さ0.44mを測る。主軸方位はほぼ座標北を向く。

第381图 第1~3号棚列跡・出土遺物



長辺の壁はほぼ垂直に掘り込まれるのに対し、短辺側ではやや袋状になる。底面は中央部が深く、短辺側にやや浅くなる。埋土にはローム粒子・ロームブロックが多量に含まれ、明らかに人為的に埋め戻されたものと考えられる。

北東コーナー部の底面にはロクロ土師器高台碗が「正位」の状態で見出されていた。骨は検出されなかったが、形態や高台碗の出土から土壌墓と考えて良いものであ

(8) 性格不明遺構

性格不明遺構は2基検出された。

第1号性格不明遺構 (第383図)

第1号性格不明遺構は、F-15・16グリッドに位置する。第23・24号住居跡と重複し、本遺構が住居跡を切っていた。

平面形態は円形で、ドーナツ状に巡る、浅い溝状遺構である。規模は直径4.96m、溝幅0.96m～1.45m、深さは0.05～0.10mほどである。埋土は、溝の内円に沿って炭化物粒子を多量に含む暗褐色土が堆積し、その外側に炭化物を含まない暗褐色土が堆積していた。遺構の性格は不明である。

出土遺物は土師器環細片と、土鏝が検出された(第383図)。土師器環は底部平底になるものと思われ、遺構の重複関係からみても第1号不明遺構に伴うものではない。時期は、10世紀後半以降の住居跡を切っていることから、それより降ることは確実である。中世段階のものであろうか。

第2号性格不明遺構 (第384図)

第2号性格不明遺構は、C・D-19・20グリッドに位置する。平面形態は不整形で凹凸が顕著である。規模は長軸長3.36m、短軸長2.88m、深さは0.88mを測る。主軸方位はN-26°-Wを指す。

遺構確認段階で主に住居北半で焼土の厚い堆積層が認められた。掘り下げたところ、覆土上面に焼土層が覆っていた。底面は凹凸が激しく、側壁は大きくオーバーハングしていた。焼土層の下部はロームブロックを斑点状に含む黒色土が堆積している(第4層)。ほと

る。第118号住居跡からもほぼ同時期の遺物が出土しており、両者の時期差はほとんど認められない。住居廃絶後、ほどなく土壌墓が掘り込まれたものと考えられる。廃屋墓といえる。

ロクロ土師器高台碗は内面へラミガキと黒色処理が施されており、ほぼ完形である。副葬品と考えられる。今回の整理段階では、遺物が行方不明となっており図化できなかった。次回の報告で補遺したい。

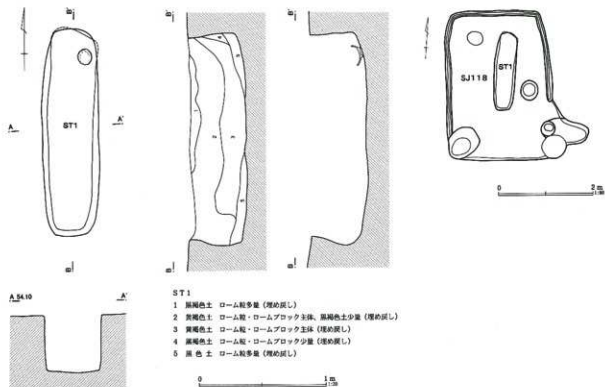
んど土層変化がなく、人為的に埋め戻された可能性が高い。遺構の性格は不明であるが、壁のオーバーハング状況や埋土の状況から土探り跡と考えるのが妥当であろう。側壁には粘土はなく、ローム質の土壌が堆積していることから、このローム質土を採掘したものとと思われる。

出土遺物は比較的多い。特に上面の焼土層(第1～3層)に集中する傾向が認められる。土師器高環は上層の破片と最下層の破片が接合している。器種としては、土師器環・鉢・高環・甕・小型甕・壺・ミニチュア土器、須恵器高環がある(第384・385図)。

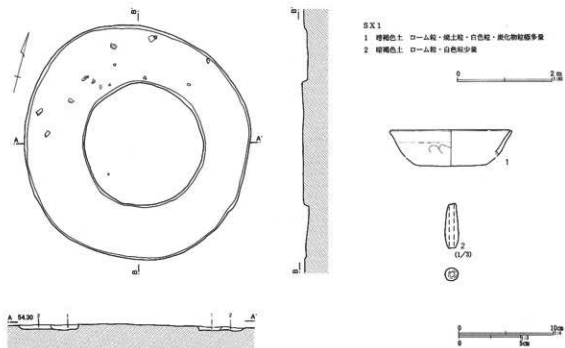
第384図1～12は土師器環である。1は比企型環。赤彩は残らない。確認面出土で混入の疑いが強い。2～8・10は模倣環、口径は11cm～12cm前後とかなり縮小している。9は有段口縁環破片で、口径は大きい。確認面出土で混入であろう。11・12は丸腕風の環で、11は口縁部が小さく内屈する。古段階の北武蔵型環である。器壁は薄い。北武蔵型環は1点のみで伴うか否か検討を要する。12は北武蔵型環に似るが、口縁部外面の屈曲に内面が対応しない。14・15は鉢または碗である。16・17は高環である。口縁部は小さく、外反が強い。脚部はラッパ状に大きく開く。

第385図18・19は小型甕、20は甕である。21はミニチュア土器で底部は突出する。22は須恵器高環破片である。素地土は細かく、青灰色に焼き上がる。産地は不明。23・24は壺。胴部は縦ケズリされる。時期は7世紀中葉頃と推定される。

第382図 第1号土墳墓



第383図 第1号性格不明遺構・出土遺物

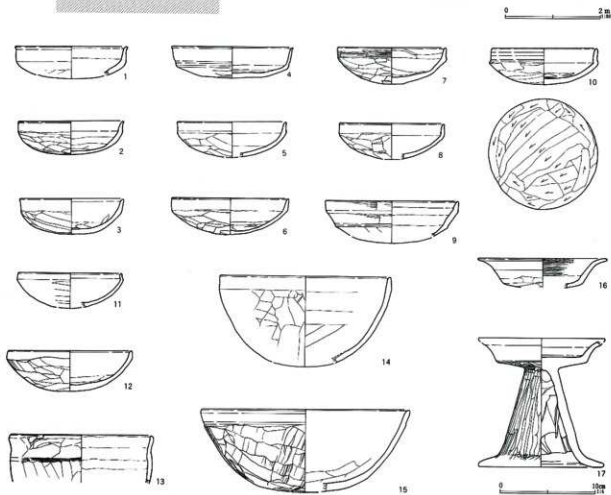
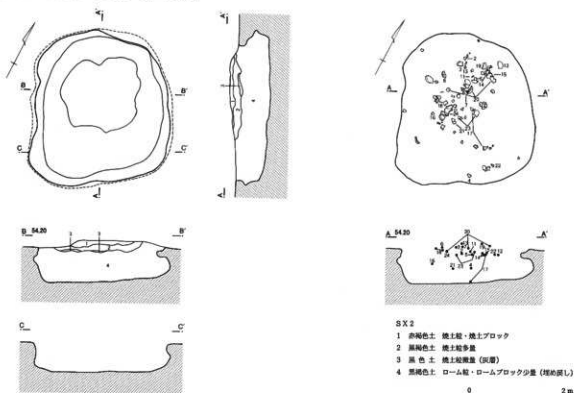


第171表 第1号性格不明遺構出土遺物観察表

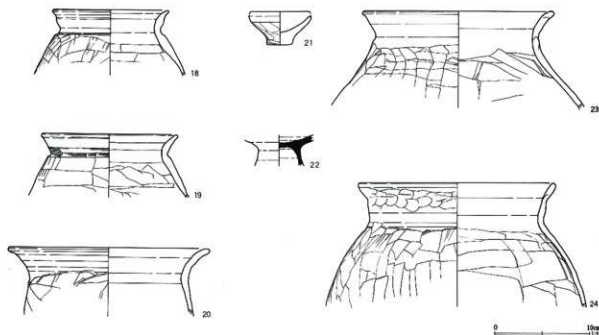
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	2.8		ADE	2	橙	10	
2	土鉢	長3.5cm	最大径1.0cm	孔径0.35cm			重量2.78g DEH 2		にぶい・橙

大塚Ⅱ区

第384図 第2号性格不明遺構・出土遺物(1)



第385図 第2号性格不明遺構出土土物(2)



第172表 第2号性格不明遺構出土土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.0		BDE	3	橙	10	確認面 比企型坏
2	坏	11.0	3.5		DEH	1	橙	70	№6
3	坏	(11.0)	3.7		DEH	1	にぶい橙	70	№3
4	坏	(13.0)	3.3		ADEH	1	橙	15	№70
5	坏	(11.4)	3.7		ADEH J	2	にぶい橙	30	№23
6	坏	12.2	3.8		AH	1	にぶい橙	60	№56
7	坏	11.4	3.8		AEH	1	橙	75	№28
8	坏	11.0	3.7		EH	1	にぶい赤褐	50	確認面
9	坏	(14.0)	3.6		DE	2	にぶい褐	20	確認面
10	坏	11.0	3.8		DEH	1	灰黄褐	95	
11	坏	(11.0)	3.6		EH J	2	にぶい黄橙	15	№24
12	坏	13.0	4.3		ADEH	1	橙	75	№19
13	鉢	(15.0)	5.0		ADE J	2	にぶい橙	20	№1 内面黒色
14	鉢	(18.0)	9.0		ADE	1	橙	15	№15・16
15	鉢	(21.8)	8.7		ADEH	1	橙	20	№14
16	高坏	(13.8)	3.0		DEH	2	にぶい橙	15	№60 内面黒色 ミガキ
17	高坏		13.2	(13.0)	ADH	1	明赤褐	70	№68 確認面
18	小型甕	(12.0)	6.7		AE	1	にぶい橙	40	№43・51
19	小型甕	(14.0)	6.6		ADEH	2	橙	40	№12
20	甕	21.4	7.1		ABDE	1	にぶい褐	70	№13・26・49
21	ミニチュア	(6.2)	3.1	2.7	ADH	1	橙	70	№75
22	須恵高坏		2.4		BE I	1	青灰	40	№73 産地不明
23	壺	20.4	10.2		ABEH J	3	にぶい黄橙	50	№36・39
24	壺	(21.0)	12.9		BDEH	1	にぶい黄橙	25	№44

(9) ピット・グリッド出土遺物

ピット出土遺物 (第386図)

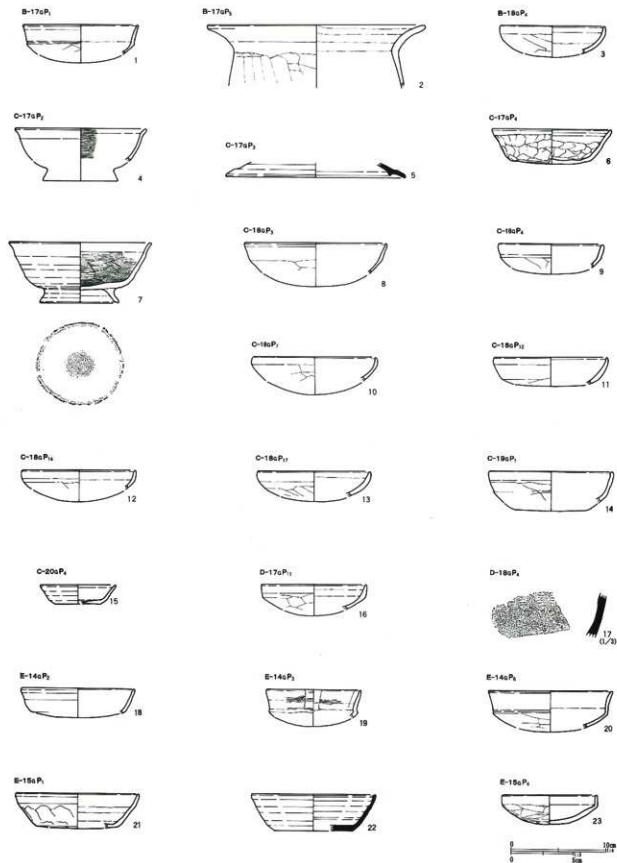
住居跡柱穴・掘立柱建物跡あるいは柵列跡と認識できな

大寄道跡II区からは多数のピットが検出されている。

い単独ピットから出土した遺物を第386図に掲載した。

大寄Ⅱ区

第386図 ビット出土遺物



第173表 ビット出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.0)	3.1		A E H	2	橙	10	B-17 P 1
2	甕	(23.0)	6.6		A B E I J	1	黒褐	20	B-17 P 2
3	環	(11.0)	2.9		A E H	2	橙	10	B-18 P 4
4	高台椀	(14.0)	3.4		A E H	2	にぶい橙	5	C-17 P2 ロクロ土師器 内面ミガキ
5	須恵蓋	(19.0)	1.5		B E H I	2	褐灰	5	C-17 P3 末野産
6	環	12.5	3.6	8.4	A B D E H	1	にぶい赤褐	70	C-17 P 4
7	高台椀	(15.0)	6.3	8.3	B D H	1	にぶい橙	50	C-17 P4 ロクロ土師器 内面黒色+ミガキ
8	環	(15.0)	3.1		A D E H	2	にぶい橙	20	C-18 P 3
9	環	(11.0)	2.5		D E	2	橙	5	C-18 P 4
10	環	(13.0)	2.5		A D E H	2	橙	5	C-18 P 7
11	環	(12.0)	2.8		D E H	2	橙	10	C-18 P12
12	環	(11.0)	2.0		A E H	2	橙	5	C-18 P14
13	環	(12.0)	2.6		A E	2	明赤褐	15	C-18 P17
14	環	(13.0)	3.3		A E H	2	にぶい赤褐	10	C-19 P1
15	小皿	(8.0)	2.0	(4.8)	E I	2	明赤褐	20	C-20 P 4 ロクロ土師器
16	環	(11.0)	2.6		D E H	2	にぶい褐	10	D-17 P11
17	須恵瓶				B E I	1	青灰	破片	D-18 P 4 末野産 4本単位の櫛描き点文
18	環	(12.0)	2.6		A D E H	2	橙	20	E-14 P 2
19	環	(10.0)	2.9		E H	2	にぶい橙	10	E-14 P 3
20	環	(13.0)	3.9		A E H	2	橙	15	E-14 P 6
21	環	(13.0)	3.6	(8.6)	A D E H	1	にぶい赤褐	45	E-15 P 1
22	須恵環	(13.0)	3.8	(8.3)	B E F J	1	灰白	20	E-15 P 1 南比企産
23	環	10.0	3.1		A D E H	1	にぶい赤褐	95	E-15 P 4

第174表 グリッド出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵蓋	(20.0)	1.9		A B E I	2	明赤褐	10	B-17 末野産
2	須恵高台椀	(13.8)	6.4	6.2	A E I	3	褐灰	25	C-17 末野産
3	甕	(18.0)	11.0		A E I	2	明赤褐	20	C-17
4	羽釜		9.4		D E H	2	橙	10	D-15 土師質 非ロクロ 胸部タテズリ
5	環	(12.0)	3.9	(5.6)	A E I J	2	橙	25	E-15 土師質 ロクロ整形
6	環	12.4	4.0	7.3	A B E H	1	にぶい赤褐	70	E-17
7	高台椀		4.8	(6.2)	A B E H J	2	にぶい黄橙	20	E-17 ロクロ土師器
8	環	(11.0)	3.6	5.8	A D E H J	2	にぶい褐	45	E-18
9	高台椀		2.9	(8.0)	A D E H	2	浅黄橙	15	E-18 ロクロ土師器
10	須恵蓋	(11.0)	1.5		B E I	2	灰	5	E-23 群馬産か
11	高台椀		4.4	(7.4)	A D E H J	2	にぶい橙	40	F-3 ロクロ土師器 内黒+ミガキ
12	高台椀	(15.0)	3.4		A D E	1	にぶい橙	20	F-16 ロクロ土師器
13	須恵環	(15.8)	3.1	(10.5)	B E F H J	1	灰白	10	F-18 南比企産

第386図5は末野産のかえり蓋である。C-17グリッド Pit 3 出土。6の土師器環と7のロクロ土師器高台椀は Pit 4 出土。後者は内面ヘラミガキ調整される。14は体部下端と底部をヘラケズりする土師器環と思われる。第7号掘立柱建物跡の柱穴の一部となる可能性がある。17は須恵器長頸瓶の肩部直下の破片である。4本1単位の櫛描き列点文が巡る。末野産である。22は底部全面回転ヘラケズリされる南比企産の須恵器

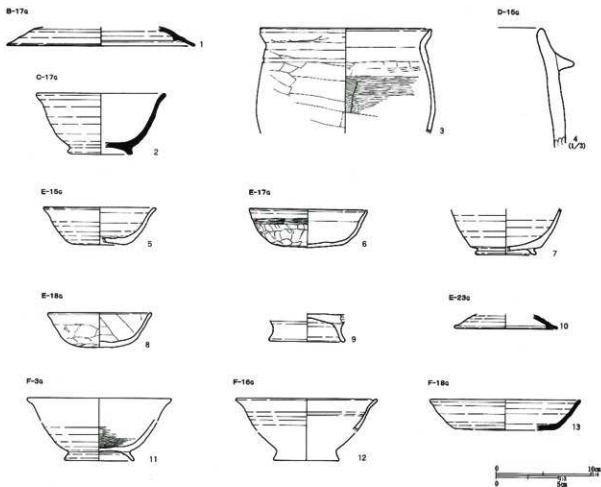
環である。

グリッド出土遺物 (第387図)

遺構に伴わずに検出されたグリッド出土遺物は、第387図にまとめた。

第387図1は末野産のかえり蓋。焼きはやや甘い。2は末野産の須恵器高台椀である。4は土師質、非ロクロの羽釜である。5は軟質須恵器、あるいは土師質の無台環である。底部は回転糸切り。6は土師器環であ

第387図 グリッド出土遺物



る。底部は平底風で、ヘラケズリ調整される。7はロクロ土師器とすべきか軟質須恵器とすべきかよくわからない。高台椀である。表面は酸化、内面は一部還元している。9はロクロ土師器高台椀。10は小振りのかえり蓋。胎土・焼成共に良い。群馬産か。11・12はロ

クロ土師器高台椀である。11は内面ヘラミガキと黒色処理が施されている。13は南比企産の無台杯。推定口径15.8cmと大振りて、底部は全面回転ヘラケズリ調整されている。

(10) II区出土金属器

第388図には大寄遺跡II区から出土した金属器を掲載した。11~13は尖根鐵系統の鉄鎌で、中世的な鉄鎌の初現を探るうえで注目されるものである。12には不鮮明であるが、透かが入る。24・25は青銅製品。27は混入か。

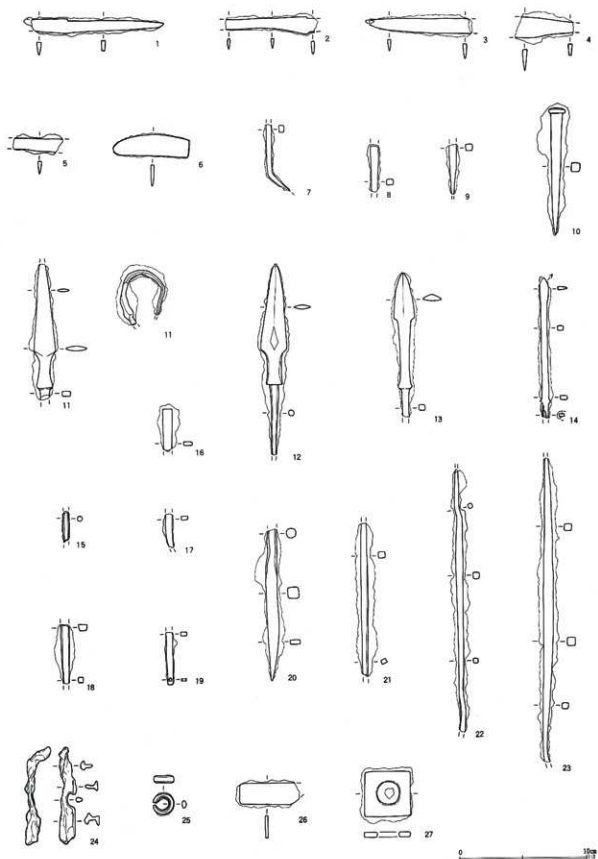
第388図1は刀子で、切先部を欠く。残存長10.4cm。棟側に関が付く片関式である。柄部長7.6cm。第15号住居跡出土。

2は刀子で、切先と柄部を欠く。残存長7.3cm。片関式。第21号井戸跡出土。

3は刀子で、切先と柄部を欠く。残存長8.1cm。第66号住居跡出土。

4は刀子で、刀身部から柄部にかけての破片である。無関式と思われる、棟側の刀身部と柄部は段差なく連続する。第66号住居跡出土。3と同一個体の可能性もあるが、接点はない。

第388图 II区出土金属制品



5は刀子刃部片である。残存長4.0cm。第82号住居跡出土。

6は小型鎌状製品。棟部が緩やかに湾曲する。下面は直線的で刃が付けられている。残存長6.0cm。第63号住居跡出土。

7は鋸か。残存長約6.0cm。途中で屈曲しているが、故意のものかわからない。鋸または釘の可能性もある。第55号住居跡 Pit 3 出土。

8・9は第55号住居跡 Pit 3 から出土した。釘か。9には木質部が残る。同一個体ではない。8は残存長3.7cm、9は3.9cm。

10は方頭釘である。ほぼ完存する。長さ10.0cm。断面は方形で、下部に向かって細くなる。第36号住居跡出土。

11は折り曲げられていたものを復元実測した。復元残存長10.7cm。尖根系の鉄鎌と思われる。鎌身下部に挟りが入る。関籠被で、刃部は両丸造りか。第35号土壌出土。

12も第35号土壌から出土した鉄鎌である。残存長14.8cm。尖根鎌で、鎌身下部に挟りが入る。関籠被で、基部と区画される。刃部には不明瞭であるが、菱形状の透が入るようである。鋸造りか。鎌身部長9.3cm。調査段階では第35号土壌は第54号住居跡を切っていると認識したが、住居に伴う可能性もあろう。中世的な鉄鎌形態である。

13は長三角形形式の鎌とすべきか尖根鎌系とすべきかわからない。基部との境は軸籠被か？残存長11.2cm。刃部長3.5cm。刃部は片面に鋼が付く。第71号住居跡出土。

14は片刃箭鎌である。残存長11.0cm。刃部先端を欠く。軸籠被と思われ、籠か一部残存する。

15は棒状製品。用途不明である。残存長2.3cm。第60号住居跡出土。

16は断面長方形の製品。用途不明である。残存長3.3cm。第51号住居跡出土。

17は角棒状鉄製品。釘か。残存長2.7cm。第47号住居跡出土。

18は角棒状鉄製品。釘か鎌基部の可能性もある。残存長4.6cm。第61・63号住居跡確認面出土。

19は角棒状製品。下端に円形の小孔が穿たれている。第10号住居跡出土。

20は不明棒状鉄製品。下端が柄(茎)部になろう。中央付近が方形、上端は断面円形となる。残存長11.8cm。第15号住居跡出土。No.10。

21～23は角棒状鉄製品。21は残存長12.0cm。第16号井戸跡出土。22は残存長20.6cm。E-19グリッド Pit 2 出土。23は残存長23.7cm。中膨らみの形態である。第78号住居跡出土。No.2。

24は青銅塊。不自然に曲がっており、製品とは思われない。一面面は平坦部をもつことから、平らなものに接していたと思われる。铸造時に流出したものが凝固したものか。第47号土壌出土。

25は金銅製耳環である。直径1.65cmの小型品で、内円部に一部鍍金された跡が残る。第10号井戸跡から出土した。

26は板状鉄製品である。残存長4.8cm。幅1.7cm。厚さ0.25cmを測る。用途不明である。第21号井戸跡出土。

27は座金状鉄製品。一辺3.5cmの方形板の中に直径1.8cmの円形孔が穿たれる。表採されたもので、近現代のものか？。

(II) 追加・訂正遺物

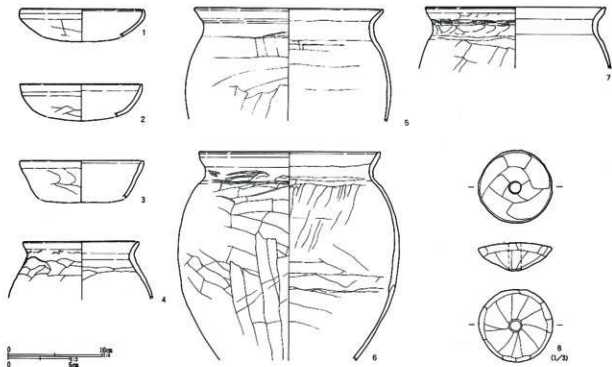
不手際から、大寄遺跡Ⅰ区第203号住居跡から出土した遺物の一部に掲載漏れがあった。お詫びして訂正したい。

第389図1～3は土師器環である。1は混入であろ

う。2は確認面出土。3は第3号土壌から出土したもので、平底環と思われる。4～7は土師器甕。4は小型(台付)甕、5～7は「コ」の字状口縁甕である。頸部が短く、口縁部の屈曲が弱まっており、新しい様相

第389図 追加・訂正遺物

I区 S.203



第175表 追加・訂正出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)	2.9		DEH	2	橙	10	SJ203
2	坏	(13.0)	3.4		AEJ	2	明赤褐	10	SJ203 確認面
3	坏	(13.0)	4.0		DEH	2	橙	20	SJ203 SK3
4	小型甕	(12.2)	6.1		DEH	1	にぶい橙	50	SJ203 SK3
5	甕	(20.0)	11.7		ABEJ	2	にぶい橙	15	SJ203 SK3
6	甕	(19.0)	22.0		ADEJ	2	にぶい橙	40	SJ203 SK3
7	甕	(19.0)	6.4		ADH	1	にぶい褐	15	SJ203 SK3
8	土製紡錘車	上径5.85cm 下径5.0cm		孔径0.8cm			厚さ2.15cm 重量52.66g	ADEH 2	にぶい赤褐 SJ203 SK3

がみられる。8は土師質の土製紡錘車である。完形品。号土壌から検出された。

ヘラケズリによって仕上げられている。3～8は第3

大寄 I 区

第176表 大寄道跡II区遺構新旧対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SJ1	SJ160	SJ48	SJ31	SJ95	SJ28	SE7	SE7	SK18	SK29
SJ2	SJ270	SJ49	SJ127	SJ96	SJ32	SE8	SE8	SK19	SK31
SJ3	SJ271	SJ50	SJ26	SJ97	SJ63	SE9	SE10	SK20	SK38
SJ4	SJ8	SJ51	SJ118	SJ98	SJ61	SE10	SE9	SK21	SK39
SJ5	SJ9	SJ52	SJ146	SJ99	SJ94	SE11	SE13	SK22	SK40
SJ6	SJ97	SJ53	SJ105	SJ100	SJ60	SE12	SE14	SK23	SK41
SJ7	SJ16	SJ54	SJ104	SJ101	SJ51	SE13	SE15	SK24	SK42
SJ8	SJ17	SJ55	SJ96a・b・c	SJ102	SJ58	SE14	SE42	SK25	SK43
SJ9	SJ35	SJ56	SJ156	SJ103	SJ57	SE15	SE41	SK26	SK44
SJ10	SJ85	SJ57	SJ33	SJ104	SJ59	SE16	SE34	SK27	SK45
SJ11	SJ106	SJ58	SJ13	SJ105	SJ102	SE17	SE16	SK28	SK46
SJ12	SJ36	SJ59	SJ34	SJ106	SJ88	SE18	SE17	SK29	SK53
SJ13	SJ50	SJ60	SJ12	SJ107	SJ55	SE19	SE21	SK30	SK54
SJ14	SJ62	SJ61	SJ14	SJ108	SJ45	SE20	SE20	SK31	SK57
SJ15	SJ54	SJ62	SJ46	SJ109	SJ86	SE21	SE35	SK32	SK58
SJ16	SJ37	SJ63	SJ27	SJ110	SJ155	SE22	SE44	SK33	SK59
SJ17	SJ53	SJ64	SJ65	SJ111	SJ128	SE23	SE32	SK34	SK65
SJ18	SJ21	SJ65	SJ66	SJ112	SJ149	SE24	SE33	SK35	SK60
SJ19	SJ22	SJ66	SJ38	SJ113	SJ154	SE25	SE38	SK36	SK61
SJ20	SJ40	SJ67	SJ15	SJ114	SJ151	SE26	SE43	SK37	SK62
SJ21	SJ39	SJ68	SJ122	SJ115	SJ152	SE27	SE45	SK38	SK66
SJ22	SJ20	SJ69	SJ83	SJ116	SJ153	SE28	SE47	SK39	SK67
SJ23	SJ72・b・c	SJ70	SJ56	SJ117	SJ124	SE29	SE54	SK40	SK68
SJ24	SJ80	SJ71	SJ25	SJ118	SJ112	SE30	SE55	SK41	SK69
SJ25	SJ52	SJ72	SJ84	SJ119	SJ123	SE31	SE60	SK42	SK71
SJ26	SJ44	SJ73	SJ91	SJ120	SJ110	SE32		SK43	SK72
SJ27	SJ29	SJ74	SJ92	SJ121	SJ111	SD1	SD5a・5b	SK44	SK73
SJ28	SJ26	SJ75	SJ113	SJ122	SJ218	SD2	SD6	SK45	SK75
SJ29	SJ48	SJ76	SJ100	SJ123	SJ211	SD3	SD3	SK46	SK76
SJ30	SJ30	SJ77	SJ107	SB1	SB43	SD4	SD4	SK47	SK77
SJ31	SJ67	SJ78	SJ108	SB2	SB44	SK1	SK17	SK48	SK91
SJ32	SJ68	SJ79	SJ109	SB3	SB10	SK2	SK18	SK49	SK95
SJ33	SJ69	SJ80	SJ103	SB4	SB16	SK3	SK19	SK50	SK92
SJ34	SJ81	SJ81	SJ98	SB5	SB2	SK4	SK20	SK51	SK93
SJ35	SJ82	SJ82	SJ116	SB6	SB34	SK5	SK21	SK52	SK94
SJ36	SJ71	SJ83	SJ150	SB7	SB36	SK6	SK22	SK53・54	SK114
SJ37	SJ7	SJ84	SJ24	SB8	SB33	SK7	SK25	SK55	SK113
SJ38	SJ114	SJ85	SJ41	SB9	SB32	SK8	SK26	SK56	SK117
SJ39	SJ117	SJ86	SJ42・43	SA1	SA1	SK9	SK27	SK57	SK152
SJ40	SJ10	SJ87	SJ18	SA2	SA6	SK10	SK28	SK58	SK151
SJ41	SJ145	SJ88	SJ19	SA3	SA7	SK11	SK30	SK59	SK156
SJ42	SJ125	SJ89	SJ90	SE1	SE1	SK12	SK23	SK60	SK154
SJ43	SJ101	SJ90	SJ70	SE2	SE2	SK13	SK24	SK61	SK155
SJ44	SJ99	SJ91	SJ87	SE3	SE3	SK14	SK32	SK62	SK157
SJ45	SJ49	SJ92	SJ95	SE4	SE4	SK15	SK33	SK63	SK158
SJ46	SJ11	SJ93	SJ89	SE5	SE5	SK16	SK34	SK64	SK159
SJ47	SJ23	SJ94	SJ47	SE6	SE6	SK17	SK37	SK65	SK232

VI まとめ

1. 羽釜出現期以降の土器群について

はじめに

大寄遺跡では古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡が約480軒検出された。なかでも10世紀以降、いわゆる羽釜を伴う段階の住居跡が多数を占める点は本遺跡の最大の特徴といっても良く、8・9世紀のいわゆる律令期集落の解体と再編、あるいは連続性を解明するうえで、恰好の材料を提供したといえる。本稿では、こうした「ポスト律令期」集落論の前提となる該期の土器様相に関して、若干の整理を試みたい。近年における該期の土器論、就中、編年論に関しては、水口由紀子(水口1990)、田中広明・末木啓介(田中・末木1997)、末木啓介(1999)等によって検討されている。また、荒川正夫は、[大久保山IV]において、該期を含む出土土器群に対して年代的な位置付けを付与している(荒川1999)。ここではそれらを参考にして、大寄遺跡における出土土器群の様相を整理しておきたい。

編年

大寄遺跡全体の様相は次回報告を待たねばならないが、現時点の資料を用いる中で、羽釜出現期以降の土器様相に関する検討を主眼とする。該期の土器群に関しては、地域毎の偏差が大きいこと、遺構単位の出土遺物に偏りが多く、セット関係の把握が難しいこと、更には暦年代比定のメルクマールに乏しいなどの問題点を内包しており、あくまで試案として提示しておきたい。

編年指標としては基本的に、環型土器(環)の形態変化を主眼に置いた。環は10世紀前葉以降小型化(口径及び器高の減少)を遂げ、小皿といわれる器形に変化する。この小皿も同様に新しくなるに従って、口径の減少、扁平化が進むものと考えられる。他には、須恵器の減少と消滅、須恵器的な器種の減少、羽釜の増加、ロクロ土器器高台碗の定型化等を考慮した変遷案であるが、環、小皿以外の器種に関しては、それらに伴うものを図示したに過ぎず、形態変化を明瞭に解明

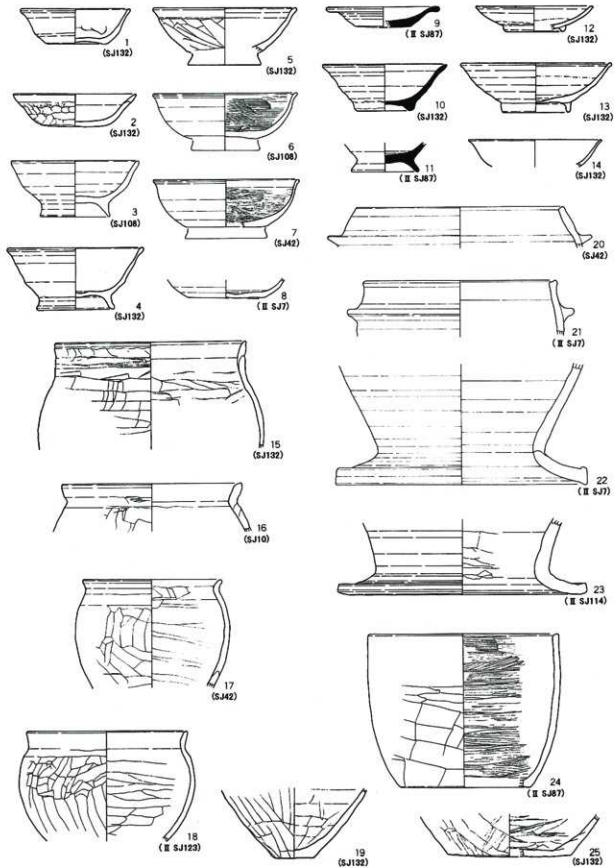
できるほどの内容とはなっていない。課題は多いが、この前提のもとに、羽釜出現期以降の土器群を大きくA期～E期に大別した。

A期(第390図)

北武蔵型環・武蔵型環に象徴される古代的、あるいは平安前期的な土器様相が大きく変質する段階である。I区132号住居跡を標式としたが、本書の報告分においては、良好な資料に乏しい。I区10・42・108号住居跡、II区7・87・114・123号住居跡出土資料などで補った。集落自体も一時的な減少期にあるものと思われる。ロクロ土器器環(1)は須恵器無台碗の形状を保っているが、口径が11.3cmと小型化している。底部糸切り。非ロクロ土器器環(2)は口径13.0cmと比較的大きいが、体部から口縁部にかけての開きが大きい。体部指押さえ、底部はナデカ。ヘラ削り痕は見られない。恐らくこの段階に小型化した非ロクロ環に伴うものと思われ、該期を以って北武蔵型環として長く命脈を保った非ロクロ環も消滅すると考えている。

ロクロ土器器高台碗は、器壁がやや厚いものがあり、全体にぼったりした印象を受ける。A類とB類に大別される。A類は器形的に須恵器高台碗の流れを受け継ぐものと考えられ(3・4)、体部の膨らみが弱く、ヘラミガキと黒色処理は基本的に施されない。5は体部に手持ちヘラ削り調整が施されている。B類は体部に丸みを持つ碗タイプで、内面ヘラミガキと黒色処理を基本とする。6・7が相当する。次段階以降出土量が急増するタイプである。セット関係に難があり、本段階の資料とするのは適切ではないかもしれない。8は無台碗と思われる。

9は須恵器無台皿で、口径は12cmと小型化し、還元焙焼成されているが、焼きは甘い。10・11は須恵器高台碗。厚ぼったい作りで体部は大きく開いている。10の高台は幅広く低い。小型化した須恵器無台環も伴うと思われるが、良好な資料がない。須恵器自体、本期



の中で、ほぼ消滅するものと考えられる。

土師器甕は口縁部が直立するもの(15)と「く」の字状に短く屈曲するもの(16)がある。いずれも器壁は厚く、胴部に横へら削りが施されている。19は底部片で縦方向のへら削り調整が見られる。器形や調整方法に武蔵型甕の残影を辛うじて見ることもできる程度である。17・18は小型甕で、胴部はへら削り調整されている。

20・21は羽釜である。恐らく本段階から出現するものと思われるが、132号住からは出土していない。I区42号住、II区7号住居跡出土例を図示したが、いずれも他時期の遺物と混在する中から抽出したもので良好な資料とは言えない。土師質でロクロ調整、鈿部はしっかりした作りである。22・23は孔部がラッパ状に開く甕である。22は須恵質。23は本期に含めて考えたが、伴出遺物から見る限りより新しい段階に下降する。このタイプの甕の存続期間を再検討すべきかもしれない。

灰釉陶器は東濃産、大原2号様式段階の高台碗(13)と東遠江産の高台皿(12)がある。緑釉陶器は東濃産である(14)。いずれもI区132号住居跡出土である。

B期(第391・392図)

ロクロ土師器小皿が出現・定型化すると共にロクロ土師器高台碗が定量で伴う段階である。集落としても増加に転じる。I区176号住居跡、II区27・37・81号住居跡出土遺物などが標識となる。特にI区176号住居跡からはロクロ土師器小皿がまとまって出土している。

ロクロ土師器小皿は大きくA類とB類に分かれる。A類は須恵器無台環をスケールダウンした形態で、前段階の小型環からの系譜を引くものと考えられる。体部中位に腰をもち、口縁部が外反するタイプをA1類(1~7)、体部が直線的に外傾するものをA2類とした(8~14)。法量は口径10cm前後を主体とし、8.5~10.4cm、器高は3cm前後を中心とし2.4~3.4cmに分布する。前代の環に比較して口径・器高共に一回り小型化している。

B類は底径が比較的大きく、扁平な皿タイプである。

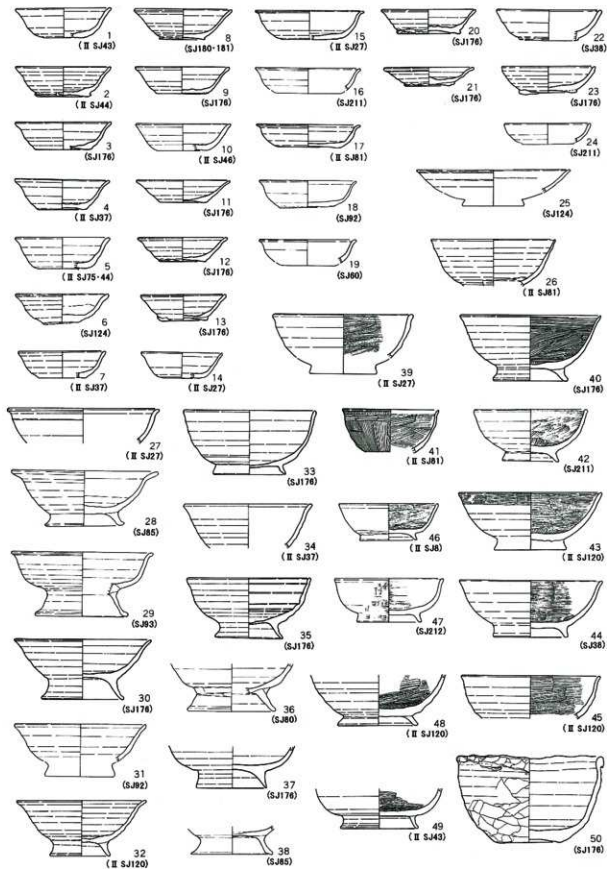
形態から3タイプに分かれる。B1類は体部に腰をもち、口縁部は小さく外反するタイプ(15~19)、B2類は体部から口縁部にかけて比較的直線的に外傾するタイプ(20・21)、B3類は体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がるものである(22~24)。B類に関しては前代からの系譜を辿るのは難しく、現状ではB期に出現したものと理解しておきたい。B1類は口径10.0cm~11.5cm、器高2.4~3.1cmに分布する。A類に比してやや口径の大きいものが多いようである。B2類としたものは2点あるが、本期に特徴的な器種とはいえないかもしれない。寧ろ、次期以降一般化するタイプといえよう。21はB2類としたが、底径が小さく、A類に含めた方が妥当かもしれない。B3類は3点のみである。小片の24を除くと、口径10cm代、器高は3cm前後となる。

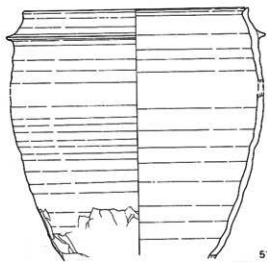
各類の伴出関係を見ると、I区176号住居跡で、A1類とA2類、B2類、B3類の共伴が確認できる。また、A類とB1類の共伴関係はII区27号住居跡で認められる。I区176号住居跡出土資料は、口径がやや小さく器高の浅いものが含まれ(21)、本期から次期にかけての資料とみた方が良いかもしれない。

ロクロ土師器高台碗A類はバリエーションが多く、タイプ設定が難しいが、体部から口縁部にかけて[S]字状に外反する浅碗タイプ(27~32・34)と口縁部直立気味に立ち上がる深碗タイプに大きく分かれる(33・35)。前者、つまり見かけの浅碗タイプにも形態差が大きく、高台形状もさまざまで、詳細な分類と時期的あるいは地域的な指標を導くのは今後の課題といえよう。

ロクロ土師器高台碗B類についても浅碗タイプ(43~47)、深碗タイプ(39~42)を見出すことは可能である。それぞれのタイプは口径15~16cm前後の大型品と、口径10~12cm前後の小型品の2種に分かれている。A類同様、編年的な指標を見出すのは現状では難しいが、本期以降主要な器種として定着するものと考えてよからう。

羽釜はロクロ整形のもの(51・52・54)と非ロクロ

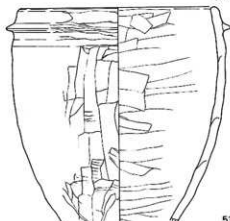




51
(Ⅱ S.J81)



52
(S.J80)



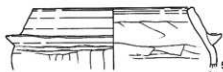
53
(S.J211)



54
(Ⅱ S.J46)



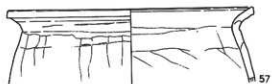
55
(S.J180-181)



56
(S.J38)



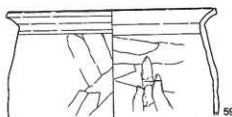
64
(S.J38)



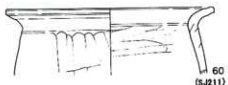
57
(Ⅱ S.J27)



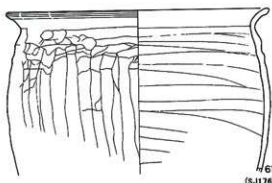
58
(Ⅱ S.J27)



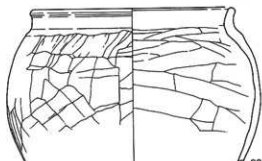
59
(Ⅱ S.J81)



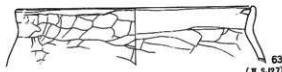
60
(S.J211)



61
(S.J176)



62
(S.J180-181)



63
(Ⅱ S.J27)

整形のもの(53・55・56)の2者がある。土師質が主体であるが54は須恵質の焼き上がりである。56は小型で、胴部の張りが強いなど通例と異なるタイプである。甕は口縁部が[く]の字に強く折れ、端部が面取りされるもの(57-60)と口縁部が短く外反、または直立気味に立ち上がり、端部が丸みを帯びたもの(61-63)がある。

小型甕(64)はロクロ調整され、胴部下位はヘラケズリが施される。鉢(50)はロクロ調整され、口縁部は折り曲げて複合口縁化し、胴部は雑にヘラケズリされている。

C期(第393・394図)

ロクロ土師器小皿は前段階よりも小型化、扁平化が進む。B期に見られたA1類、A2類、B1類、B2類、B3類は存続し、器種構成に大きな差は見られない。その意味ではB期・C期は同一段階の古相、新相とすべきかもしれないが、B2類の定型化を以って分割した。A1類はB期に比して、器高の減少が進む。口径は10cm前後を主体に、9.2cm-10.6cmに、器高は2.5cm前後を中心に、2.2-2.8cmに分布する(1-8)。A2類はA1類よりも僅かに小型化するようである。口径は9.0cm-10.0cm、器高は2.5cm前後にまるとまる(9-13)。

B1類は定量で存在する。前期に比して若干小振りとなるようだ。口径は10.0cm前後、器高は2.6cm前後にまるとまる(14-18)。B2類は本期を特徴付けるとしてもよいかもしれない(19-22)。B期にも存在するが、定量存在とはいえない。本期のそれは底部外縁が厚く、口縁部に向かって先細りするタイプが主流となるようである(19・21・22)。B期のB2類に系譜関係が迫れるか否かは現状では不明確である。口径は10.0cm、器高は2.5cm前後を中心に、口径9.8cm-11.0cm、器高は2.2cm-2.7cmに分布する。B3類も小型化・扁平化する(23-25)が、特に、体部中位に明瞭な腰を持つものが存在する点は注意される(23・24)。口径は9.2-10.3cm、器高は2.4-2.7cmに分布する。

C類としたものは底部がヘラ切りされたもので、本

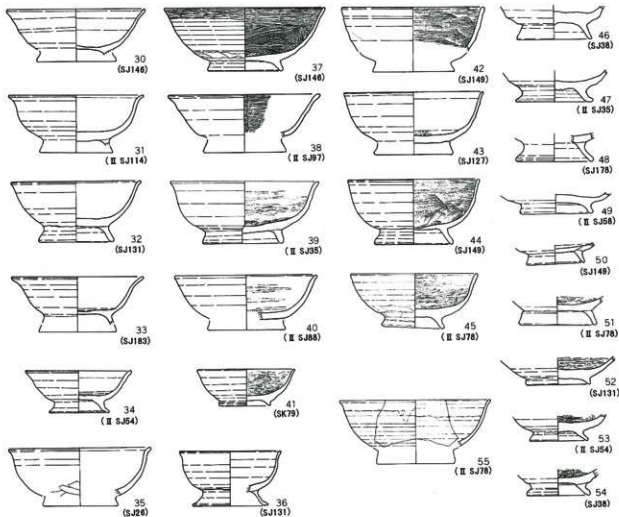
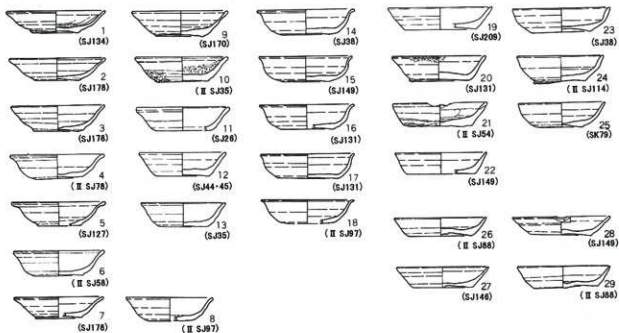
期のみに見られる(26-29)。他のロクロ土師器が全て回転糸切り離してあるのに対し、異質な存在である。律令期以来「ヘラ切り文化圏」の伝統を有する東関東地方に系譜が求められる可能性があろう。形態的には幅広の底部を持ち、口縁部に向かって先細りするなど、B2類に類似する。胎土から見る限り、在地産の小皿とあまり相違はないように見受けられ、搬入品か否かの検討は今後の課題としたい。口径は9.8-10.4cm、器高は1.9-2.3cmに分布し、非常に扁平な皿形態である。

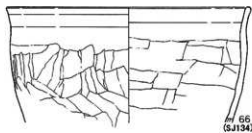
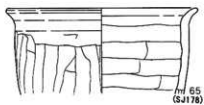
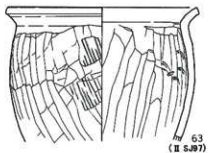
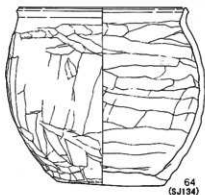
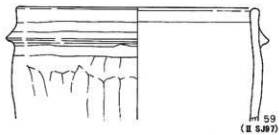
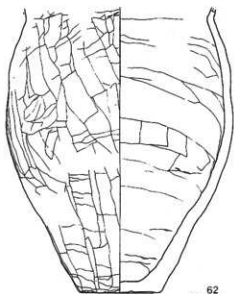
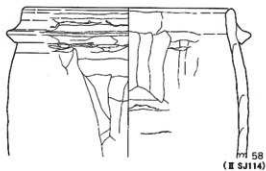
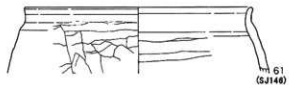
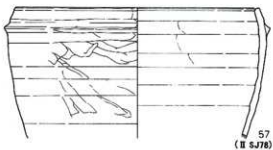
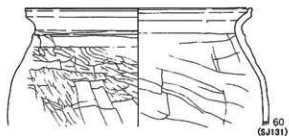
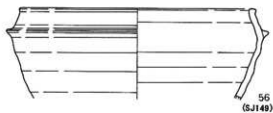
ロクロ土師器高台椀は前期同様A類・B類がある。A類は坏部が浅い、見かけの浅碗風のもの(30-34)、深碗風のもの(35-36)がある点も前段階と同様である。大きさに大小2種があり、大きい一群は口径14-15cm前後、小さい一群は口径10-11cm前後である。B類も浅椀(37-41)、深椀(42-45)の両者がある。口径15-17cm前後の大型品と、10cm代の小型品、13-14cm前後の中型品がある。高台形状は高脚、低脚、端部の丸いもの、端部に沈線を巡らすものなどバラエティーが多く、时期的な特徴を抽出できない。また、体部下端にヘラ削りを施す一群がある点は注意される(35・37・45)。

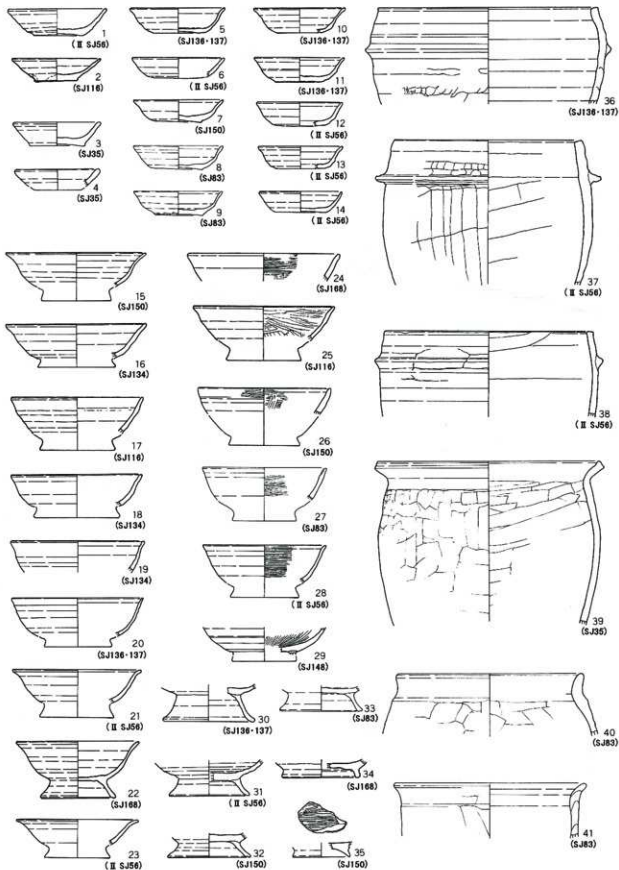
灰釉陶器高台椀(55)は東濃産、大原2号様式段階と思われ、伴出するロクロ土師器小皿を基準に考えると直接伴う可能性は低であろう。

羽釜は全て土師質で、ロクロ調整されるもの(56・57)と非ロクロ整形のもの(58・59)がある。56は胴部で強く屈曲し、胴部はすばまるタイプで、特徴的である。罎はやや低く貧弱な印象を受ける。非ロクロの羽釜は胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、胴部調整はナデまたは粗いヘラケズリを施す。

甕の様相は不明確である。口縁部を上方に摘み出すもの(60)、短く直立させるもの(61)、長胴形態のもの(62)がある。いずれも胴部はヘラケズリ調整が施されている。小型甕(63)は口縁部に面取りを持つ。胴部はナデ調整されるが、一部叩き痕、内面には当て具痕と思われる窪みが残る。須恵器的な技法を持つもので、異質である。64も口縁部は面取りされてい







る。広口の小型甕で、胴部は粗いヘラケズリ調整が施されている。65・66は鉢と思われる。

D期 (第395図)

ロクロ土師器小皿は口径、器高の低減化が進むという流れは変化ないが、A類、B類共に系統関係は変容してくるようだ。A1類は底径の変化が少ない中で、口径・器高が縮小するため、B類化が進む。結果的にB1類と同質化するようである(5-13)。皿型化するという点でB1類としておくが、前段階にみられたB1類と比較すると、口縁部が短く外反するものは本期には既にみられない。A1類の糸譜を引くとも、B1類の変化とも考えられるが、やはり両者の折衷形態とみるのが妥当であろう。口径は9.0-10.0cm、器高は2.5cm前後に分布する。

1-4に関してもA2類、B2類の折衷形態とみた方が良いかもしれないが、とりあえずA2類としておく。特に3・4は器壁が厚くぼったりした作りは特徴的で、本期に出現するタイプと考えられる。口径は9.0-10.3cm、器高は2.4-2.8cmに分布する。14は体部から口縁部にかけて、やや内湾気味に立ち上がるタイプで、B3類とすべきであろうか。口径8.2cm、器高2.2cm。

ロクロ土師器高台碗はA類、B類両者が存在する。A類(15-23)は体部に強く張りを持つタイプは殆どなく、坏部が浅く口縁部が斜め上方に伸びるタイプが主流となるようである(15-16-22-23)。口径は13-15cm前後に分布する。小型タイプの存在は不明確であるがおそらく存在するのであろう。前段階に比して、全体にやや小型化、浅碗化傾向にあるといえよう。高台は比較的高いものが多いが、浅いものも存在する(30-34)。

B類は良好な資料に乏しく、具体的な様相を明らかにできない。組成上、減少傾向にあるとみた方がよいかもしれない。器壁が厚いものが目に付く(24・26・27)。形態的には、体部の膨らみが弱く、口縁部にかけて外傾する浅碗風のものは存在する(25・28)が、深碗風のものは29にその可能性がある程度である。

羽釜はロクロ整形(36・38)、非ロクロ整形(37)の両者がある。36は前期(第394図56)からの糸譜を引くものか。罫は低く、痕跡的である。

甕は口縁部が短く「く」の字に折れ、端部に面取りされるもの(38)と、口縁部が短く上方に立ち上がるもの(40)がある。41は鉢か。

E期 (第396図)

I区156・159・171・II区7・122号住居跡等が該当する。但し、I区171号住居跡、II区7号住居跡・122号住居跡は時期の異なる遺物が混じっている可能性が高く、新相を示すものを本時期とした。

ロクロ土師器小皿はA2類、B1類が認められる。A2類は小さい底部から直線的に外傾するもので、口径9.0cm、器高2.0cm前後である(1・2)。D期のA2類よりも扁平化しているが、直接的な系統関係にあるか否かは現状では不明である。

B1類は本期の主体となるタイプである。体部下部に腰をもち、口縁部が緩やかに外反する(3-10)。口径は8.4-9.6cm、器高は1.8-2.2cmに分布する。器高が2.0cm以下となるものが主体となり、大寄遺跡においては小皿が最も扁平化する段階である。

11は台状底部をもつ皿と思われる。底部は回転系切り、胎土は精良で、搬入品の可能性が高いと考えている。II区147号住居跡から出土しているが、同住居跡には直接伴う可能性は低く、本時期が相当と考えた。

ロクロ土師器高台碗は良好な資料に欠け、様相を明らかにすることはできない(14-16)。A類は脚部片のみである。B類は確実に伴う例を抽出できない。寧ろ、器種組成に占めるロクロ土師器高台碗の比重は確実に低下しているとみて良からう。

灰釉陶器は段皿(12)と高台碗(13)がある。いずれも東濃産で、虎渡山1号窯式と推定される。いずれも171号住居跡から出土しており、同住居はおそらく新古の2時期に分かれる可能性が高く、本時期とするよりも古段階に伴う土器と考えたほうが良いかもしれない。いずれにせよ、本時期に直接伴う資料ではなからう。



1
(SJS3)



6
(E SJ7)



11
(SJ147)



14
(SJ171)



2
(SJ199)



7
(SJ205)



3
(SJ171)



8
(E SJ7)



12
(SJ171)



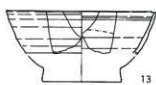
15
(SJ150)



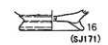
4
(SJ205)



9
(SJ171)



13
(SJ171)



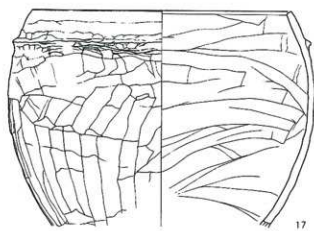
16
(SJ171)



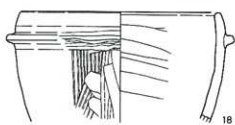
5
(E SJ122)



10
(SJ171)



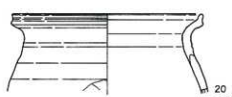
17
(SJ156a)



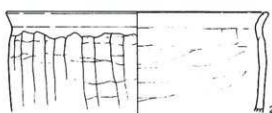
18
(SJ156b)



19
(SJ171)



20
(SJ159)



21
(SJS3)



22
(SJ156b)

羽釜は17が典型である。胴部は丸みをもち、鈿部は「ミズバレ」状を呈し、痕跡的となっている。18は小型品である。本期として良いか疑問が残る。19は鈿部が厚く長く伸びるタイプで、土鍋あるいは土釜と思われる。在地の土器組成には基本的に存在しない器形で、羽釜とは一線を画して考えた方がよいであろう。

甕は21・22が本期に伴うものと考えられる。いずれも広口の形態で、口縁部が短く外反する。非クロロ整形で胴部ヘラナゲ調整が施される。20は口縁部が積み上げられるクロロ甕で、本期に伴う可能性は低いと考えている。

以上、大寄遺跡における羽釜出現期以降の土器様相を概述してきた。

年代観と非在地系土器

続いて各段階の年代観と、併せて非在地系土器の様相に関して若干触れて結びとしたい。

まず、年代観についてであるが、この段階の年代を探るには、従来より灰釉陶器の年代観を援用する方法が一般的である。但し、灰釉陶器には伝世、あるいは混入の可能性も考慮しなければならず、扱いは慎重でなければならぬのは言うまでもない。

A期に関しては、伴出する灰釉陶器の年代から類推する以外にはない。I区132号住居跡からは東濃産、大原2号様式とおもわれる灰釉陶器が出土することから10世紀前半代を上限とすることができる。

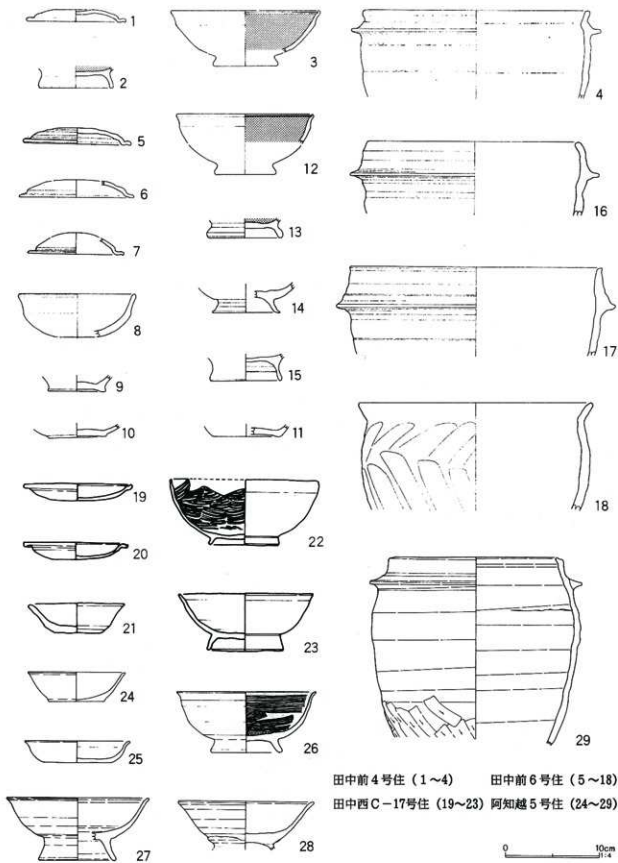
B期に関しては、京都系「ての字状口縁」の皿を取り上げたい。これは口縁部が強く外反し、端部を小突起状に収める特徴的な土器で、上里町田中前遺跡4号・6号住居跡、田中西遺跡C-17号住居跡から検出されている(第392図1・5・7・19・20)。田中前遺跡及び田中西遺跡は近接しており、「ての字状口縁」皿はいずれも類似した形態である。おそらく大きな時期差はもたないであろう。器形の判明する資料で、法量を計測すると口径10.8~11.6cm、器高1.6~1.9cmとなる。このタイプの皿は、京内から出土する土器群の編年研究を行った小森俊寛・上村憲章によれば皿Aに相当し、「Ⅲ期中」の資料では、(中略)皿Aは口径11.0cm

台から12.0cm台のものがあるが、11.0cm台~11.5cm台が主力で器高は1.0cm台程度のものである。同程度の口径のものに、器高が1.5台~2.0台のものも少数含まれる資料は少なくない(小森・上村1996)としている。

田中前・田中西遺跡から出土した皿Aは、形態や法量から小森・上村編年のⅢ期中段階に相当する可能性が高く、実年代は平安京内裏土壇25の「應和」銘の墨書土器や薬師寺西僧坊の焼失(天延元年)に伴う土器群から、應和年間(961~963年)から天延元年(973年)を含み、前後に若干の幅を持つものと推定されている。直接的に対比するならば、田中前遺跡4号・6号住居、田中西遺跡C-17号住居出土土器群に対して10世紀後半、3/4期を中心に4/4期に掛かる時期と考えるのが妥当であろう(註1)。翻って、「ての字状口縁」皿に伴う在地系土器を見ると、クロロ土師器小皿A類、クロロ土師器高台椀A・B類にクロロ整形の羽釜と非クロロ整形の粗雑な甕が伴出している。小皿の内、第397図8は内面ヘラミガキ調整されているため別類とした方がよいであろう。21はA類に分類され、口径10.2cm、器高3.2cmを測る。大寄遺跡に当て嵌めれば、口径10cm、器高3cm前後の小皿にクロロ土師器高台椀が定量で伴うことからみて、B期に相当すると考えている。但し、羽釜や高台椀の形状はかなり異なるものがあり、直接的な比較は難しい。他遺跡に類例を求めると、児玉町阿知越遺跡5号住居跡が参考になる(第397図24~29)。口径10cm、器高3cmの小皿A類と口径11cmの小皿B1類、高台椀A・B類及びクロロ整形の羽釜が伴出する等、大寄遺跡B期の土器群に極めて近いと考えられる。大寄遺跡B期の年代をひとまず10世紀3/4期~4/4期にかかる頃と考えておきたい。

次に大寄遺跡C期ではI区第146・148号住居跡、第47号土壇、Ⅱ区88号住居跡から出土した、底部ヘラ切り技法を持つクロロ土師器小皿が特徴ある土器である。他の小皿はすべて糸切り離し技法によっているなかで、ヘラ切り小皿の存在は異質である。口径は10cm前後が主体で、器高2cm前後、同時期と思われる他の

第397図 参考資料



小皿に対して、より扁平化している。元来、8・9世紀の北武蔵、更には西関東では須恵器の切り離し技法としては糸切り文化圏に属しており、関東内においては、ヘラ切り技法は東関東的といえる。常陸国においては、ロクロ土師器小皿出現以降、次第に糸切り技法が主体となるというが、ヘラ切り技法も残存することが知られている。つくば市熊の山遺跡を分析した川村によれば、X期以降小皿が出現し、糸切り・ヘラ切りが並存する。XI期には糸切りに変化するという(川村1998)。また、同遺跡の土器様相を整理した小島によれば、III期～VI期にかけて小皿が存続し、V期に殆どが糸切りに変化するという(小島1998)。両氏とも具体的な年代観を述べておらず、大寄遺跡のヘラ切り小皿と直接的な対比は今後の課題となるが、将来的には東関東を視野に入れた土器様相との比較でより年代が咬られる可能性は有る。C期に伴う灰釉陶器は大原2号様式段階と思われ、年代指標とはできない。

D期・E期に関しては良好な資料がない。E期に組み込んだ灰釉陶器(第396図12・13)は虎浜山1号様式と考えられ、E期からは除外したほうが良い。遺構そのものはB期併行と思われ、その意味ではB期を10世紀後半とする傍証とはなろう。また、E期に入れた柱状高台皿(第396図11)は明らかに非在地産と思われる。柱状高台皿は信濃・甲斐・南武蔵などから出土す

ることが知られている。関東地方における平安時代後半期の土器様相を整理した服部実喜によれば、11世紀前半(服部1988)、信濃の土器編年を編んだ原 明芳によれば、吉田川西遺跡S B31段階(12世紀)に出現するという(原1988)。具体的な年代観にはばらつきがあるため、本稿ではE期に含めておいたが、大寄遺跡の下限年代を探る重要な資料となろう。

以上、年代観を探ってきたが、B期を基礎に前後に割り振るしかなく、特に下限年代に関しては今後の課題とせざるを得ない。とりあえずA期を10世紀2/4期～後半に掛かる頃、B期を10世紀3/4～4/4期に掛かる頃、C期を10世紀木葉～11世紀初頭頃、D期を11世紀前半、E期に関しては11世紀中葉を含む年代と考えておきたい。

おわりに

以上、大寄遺跡における羽釜出現期以降の土器群の様相を整理してみた。非常に雑駁な内容で、既に露呈しているように編年そのものが多くの問題点を内包している。大寄遺跡の集落構成を明らかにするための、まさに叩き台としての意味しかもたないかもしれない。次年度の報告書刊行を待って補正作業を進めたい。

註1 での字状口緑土器の年代観、大寄遺跡土器群の編年に関しては荒川正夫氏、外尾常人氏に種々ご教示いただいた。感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 赤熊浩一他 1988 『将監塚・古井戸—歴史時代編II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集
 荒川正夫 1999 『大久保山』VII 早稲田大学
 磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第177集
 市川 修 1977 『田中前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
 市川 修 1983 『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第25集
 井上尚明他 1986 『将監塚・古井戸—古墳・歴史時代編I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第64集
 岩瀬 譲 1991 『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第102集
 岩瀬 譲 1998 『地神/塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第193集
 上野真由美 1997 『広本上宿遺跡—縄文時代編』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第185集
 梅沢大久夫他 1981 『六反田遺跡—岡部町六反田遺跡調査会
 大屋道則 1996 『菅原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第169集

- 鬼形芳夫 1986 『内手遺跡』内手遺跡調査会
- 柿沼幹夫・小久保徹 1978 『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告第16集 埼玉県教育委員会
- 金子直行 1991 『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集
- 川村潤博 1998 『熊の山遺跡の奈良・平安時代の土器様相について』『研究ノート』7号 財団法人 茨城県教育財団
- 栗原文蔵・佐藤忠雄 1976 『水窪・新井遺跡の調査』埼玉県大里郡岡部町教育委員会
- 栗原文蔵・佐藤忠雄 1977 『水窪遺跡の調査』埼玉県大里郡岡部町教育委員会
- 恋河内昭彦 1996 『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書 第19集 児玉町教育委員会
- 小島 敏 1998 『つくば市熊の山遺跡の10世紀以降の土器様相』『研究ノート』7号 財団法人 茨城県教育財団
- 駒宮史朗他 1979 『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
- 小森俊寛・上村恵章 1996 『京都市の都市遺跡から出土する土器の編年的研究』『研究紀要』第3号 京都市埋蔵文化財研究所
- 佐々木幹雄他 1980 『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 佐藤好司他 1989 『諏訪遺跡(B地点)・久城前遺跡(B地点)』発掘調査報告書 本庄市埋蔵文化財調査報告第15集
- 佐藤康二 1998 『砂田前遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第198集
- 佐藤忠雄 1979 『大寄B遺跡・西浦北遺跡』埼玉県大里郡岡部町教育委員会
- 佐藤忠雄他 1978 『後榛沢遺跡群の調査』埼玉県大里郡岡部町教育委員会
- 末木啓介 1999 『埼玉県における平安時代の黒色土器と土器生産について』『土曜考古』第23号
- 鈴木徳雄 1983 『阿知越遺跡』Ⅰ 児玉町教育委員会
- 外尾常人 1992 『上里町史』資料編 上里町
- 外尾常人 2000 『水引塚遺跡』上里町教育委員会
- 瀧瀬芳之 1997 『今井川越田遺跡』Ⅲ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第191集
- 立石盛嗣 1983 『後張一本文編』Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集
- 田中広明 1992 『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集
- 田中広明・末木啓介 1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第190集
- 徳山寿樹 1997 『金佐奈遺跡-A1地点の調査』児玉町文化財調査報告書 第24集
- 利根川章彦 1998 『御林下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第223集
- 富田和夫・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡大神南・熊野大神南・今井遺跡群・一丁目・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 島羽政之 1987 『上原遺跡』岡部町埋蔵文化財調査報告書 岡部町遺跡調査会
- 島羽政之・平田重之 1991 『新田遺跡』岡部町遺跡調査会発掘調査報告書 第3集
- 島羽政之 1995 『中宿遺跡』埼玉県岡部町埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 島羽政之 1997 『中宿遺跡』Ⅱ 埼玉県大里郡岡部町遺跡調査会発掘調査報告書 第5集
- 島羽政之・宮本直樹 1997 『滝下遺跡』埼玉県岡部町埋蔵文化財調査報告書 第2集
- 島羽政之他 1997 『熊野遺跡』埼玉県大里郡岡部町遺跡調査会発掘調査報告書 第6集
- 中島 宏 1980 『伊勢塚・東光寺裏』埼玉県遺跡発掘調査報告第26集
- 長滝藏康 1991 『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書 第7集
- 中村會司 1979 『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第38集
- 中村會司 1980 『飯倉神社前遺跡・一本松古墳』埼玉県遺跡調査会報告書 第39集
- 中村會司 1989 『白山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第17集

- 西口正純 1994 『矢島南遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第149集
- 長谷川勇他 1987 『社具路遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第5集
- 服部実喜 1988 『関東地方における平安時代後半期の土器様相』 『神奈川考古』 第24号
- 原 明芳 1988 『長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相』 『長野県埋蔵文化財センター紀要』 2 長野県埋蔵文化財センター
- 伴瀬宗一 1996 『今井川越田遺跡』 II 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第178集
- 平田重之 1993 『原ヶ谷戸遺跡』 岡部町遺跡調査会発掘調査報告書 第4集
- 平田重之 1998 『上宿遺跡』 埼玉県大里郡岡部町遺跡調査会発掘調査報告書 第7集
- 前川 要 1989 『平安時代における施軸陶器の様式論的研究』 『古代文化』 第41巻8・10号
- 増田一裕 1987 『本庄住宅団地内遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告 第11集
- 増田一裕 1989 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』 II 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集
- 増田一裕 1990 『山根遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告 第18集
- 増田逸郎 1975 『千光寺』 埼玉県遺跡調査会報告第27集
- 増田逸郎他 1980 『甘粕山』 埼玉県遺跡発掘調査報告第30集
- 水口由紀子 1991 『武藏国における中世成立期の煮炊土器小考』 『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大和 修 1983 『若宮台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第28集
- 山本 靖 1996 『広木上宿遺跡—古代・中世編』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第170集
- 横川好富他 1978 『中堀・耕安地・久成前』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第15集

附編

大寄遺跡出土土器の胎土分析鑑定報告

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

目次

- 1 実験条件
- 2 実験結果の取扱
- 3 X線回折試験結果
 - 3-1 タイプ分類
 - 3-2 石英-斜長石の相関について
- 4 化学分析結果
 - 4-1 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ の相関について
 - 4-2 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ の相関について
 - 4-3 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ の相関について
- 5 まとめ

X線回折試験及び化学分析試験

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°

計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15kV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示しており、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字は、チャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb 三角ダイアグラム

第5図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。

三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mont}/(\text{Mont} + \text{Mica} + \text{Hb}) \times 100$ でパーセントとして求め、同様に Mica, Hb も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4は Mont, Mica, Hb の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第3図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb 菱形ダイアグラム

第6図に示すように菱形ダイアグラムを1~19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の内、

- 3成分以上含まれない、
- Mont, Ch の2成分が含まれない、
- Mica, Hb の2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムは Mont-Ch, Mica-Hb の組合せを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $\text{Mont}/(\text{Mont} + \text{Ch}) \times 100$ と計算し、Mica, Hb, Ch も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1~7は Mont, Mica, Hb, Ch の4成分を含み、各辺は Mont, Mica, Hb, Ch のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第4図に示すとおりである。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図、 $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 図の各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 X線回折試験結果

3-1 タイプ分類

第1表胎土性状表には大寄遺跡と折原石道遺跡より出土した土器が記載してある。

第3表に示すように土器胎土はA～Gの7タイプに分類された。

Aタイプ：Hbの1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Bタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Montの1成分に欠ける。

Cタイプ：Hb, Chの2成分を含み、Mont, Micaの2成分に欠ける。

Dタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Montの1成分に欠ける。組成的にはBタイプと同じであるが、検出強度が異なる為に、タイプが異なる。

Eタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。組成的にはCタイプと同じであるが、検出強度が異なる為に、タイプが異なる。

Fタイプ：Micaの1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Gタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

主に、 $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot 1\text{H}_2\text{O}$ (アロフェン質ゲル) で構成される。

最も多いタイプはDタイプで、26個の土器のうち8個が該当する。次いで、Eタイプの6個、Cタイプの4個、Aタイプの3個、BタイプとGタイプの各2個、Fタイプの1個となる。各タイプのうち個体数の多いC、D、Eタイプは在地あるいは在地近傍の可能性が高い。この3タイプは大寄遺跡と折原石道遺跡の土器と羽釜が共存する。

3-2 石英 (Qt) — 斜長石 (P1) の関連について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

第7図Qt—P1図に示すようにI～IVの4グループと“その他”に分類された。

Iグループ：Qtが2000以下の領域にあり、大寄遺跡の環と高台付碗が共存する。

IIグループ：大寄—1の環と14の羽釜が混在する。

IIIグループ：Qtが2000～3000、P1が700～1300の領域にあり、大寄遺跡の羽釜が集中し、折原石道遺跡の環が共存する。

IVグループ：Qtが2000～3000、P1が300～700の領域にあり、折原石道遺跡の環と羽釜が集中し、大寄—5、9、11の高台付碗と甕が混在する。

“その他”：大寄—10はP1の強度が高く異質である。

大寄遺跡の土器はQtの強度が低い領域にあり、折原石道遺跡の土器はQtの強度が高い領域にあり、両遺跡の土器は明確に分類される。大寄遺跡の羽釜と折原石道遺跡の羽釜も同様に分類される。

4 化学分析結果

第2表化学分析表に示すように、大寄遺跡と折原石道遺跡より出土した土器を化学分析した。

分析結果に基づいて第8図 $\text{SiO}_2\text{—Al}_2\text{O}_3$ 図、第9図 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{—MgO}$ 図、第10図 $\text{K}_2\text{O—CaO}$ 図を作成した。

4-1 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第8図 SiO₂-Al₂O₃図に示すようにI~IIIの3グループに分類された。

Iグループ：SiO₂の値が52~57%の低い領域にあり、大寄-7・8と折原-1・8が共存する。

IIグループ：SiO₂の値が56~66%の領域にあり、大寄遺跡と折原石道遺跡の土器が集中する。

IIIグループ：大寄-1・14はSiO₂の値の62~65%、Al₂O₃が25~26%の高い領域にあり、異質である。

基本的には大寄遺跡と折原石道遺跡の土器胎土は類似性が高い。

4-2 Fe₂O₃-MgOの相関について

第9図 Fe₂O₃-MgO図に示すように、I~IVの4グループに分類された。

Iグループ：Fe₂O₃が4.5~6%と低い領域にあり、大寄-1・14で構成される。

IIグループ：Fe₂O₃が7~13%、MgOが3~5%の高い領域にあり、大寄-2・4・7・8の5個が集中する。

IIIグループ：Fe₂O₃が7~13%、MgOが0.8~2.2%の領域にあり、大寄-5・9・10・11と折原-1・6・7で構成される。

IVグループ：Fe₂O₃が7~14%、MgOが0~1.2%の領域にあり、大寄-6の高台付碗、12~15の羽釜と折原-1羽釜と坏で構成される。

これらの関係はQt-Plの相関と類似するものである。

4-3 K₂O-CaOの相関について

第10図 K₂O-CaO図に示すように、I~IIIの3グループに分類された。

Iグループ：K₂Oが1.0~2.0%、CaOが0.3~1.6%の領域にあり、折原石道遺跡の羽釜と坏が集中する。

IIグループ：K₂Oが1.6~3.3%、CaOが1.5~3.3%の領域にあり、大寄遺跡の坏と高台付碗が集中する。

IIIグループ：K₂Oが2.3~3.8%、CaOが0.5~1.4%の領域にあり、折原石道遺跡の高台付碗と大寄遺跡の羽釜と甕が共存する。

5 まとめ

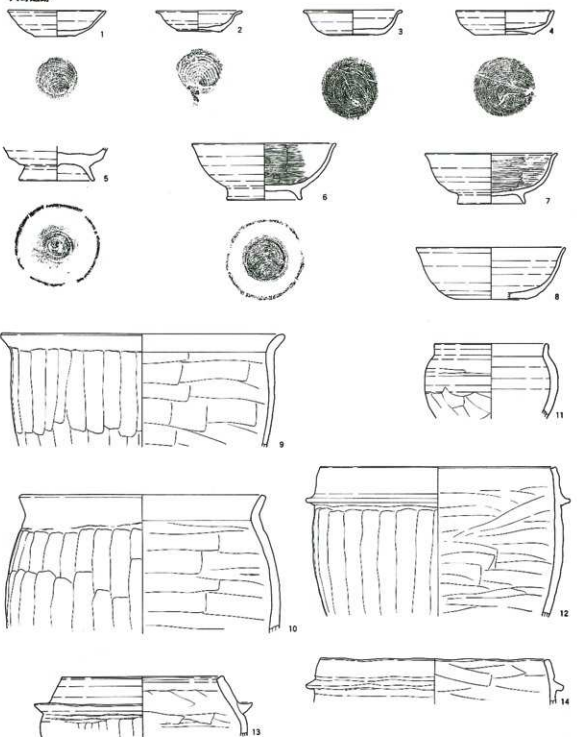
1) 土器胎土はA-Gの7タイプに分類され、C、D、Eの3タイプで全体の73%を占め、個体数の多いことから推察して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。これら3タイプは羽釜、坏、碗など多様にわたって利用されている。

2) X線回折試験に基づくQt-Pl相関では大寄遺跡の土器はQtの強度が低く、折原石道遺跡の土器はQtの強度が高い傾向があり、比較的明瞭に分かれる。大寄遺跡の羽釜はPlの強度が高く、折原石道遺跡の羽釜はPlの強度が低く、両者は異質である。大寄-10は在地の粘土であるがPlの強度が高く、異質である。大寄-1と14は粘土の組成も同じで他のものとは明らかに異質である。

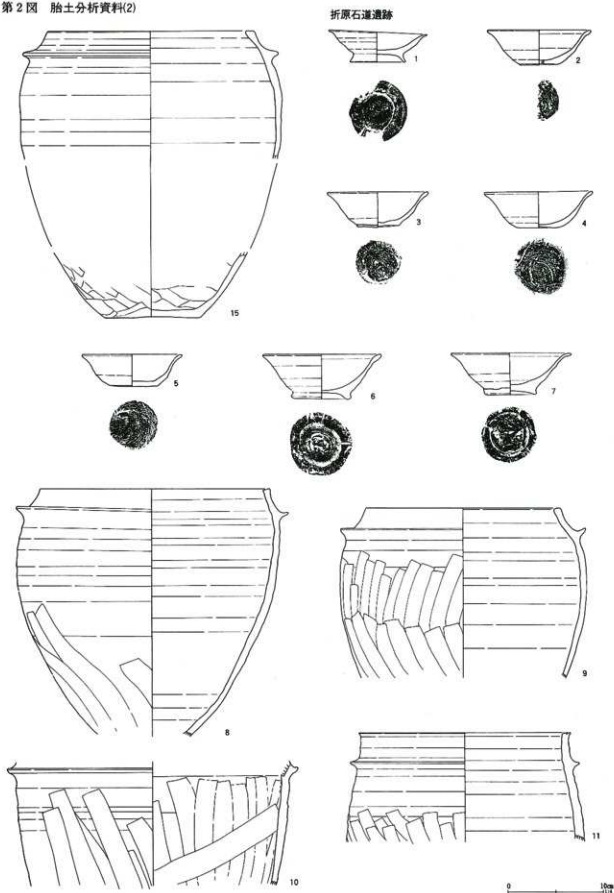
3) 化学分析結果では第4表土器分類表に示すように、MgOが高く異質、Fe₂O₃が高く異質、Fe₂O₃が低く異質、QtとPlが異質なものと5タイプに分類される。Qt-Plの相関で明らかのように、大寄遺跡と折原石道遺跡の土器は粘土の組成と砂の混合比において異なる。大寄遺跡の土器のうち大寄-6と11は折原石道遺跡の土器と関連性が窺われる。また、折原-1・6・7の高台付坏は大寄遺跡の土器と関連性が窺われる。大寄遺跡の羽釜と折原石道遺跡の羽釜は明らかに異なる。

第1圖 胎土分析資料(I)

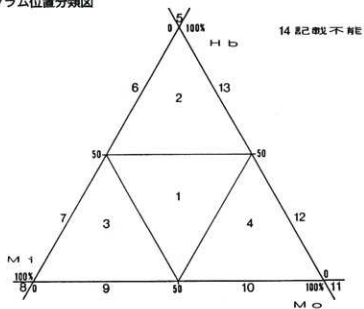
大寄遺跡



第 2 圖 胎土分析資料(2)



第3図 三角ダイヤグラム位置分類図



第4図 菱形ダイヤグラム位置分類図

